球磨史話

166
361

166-361
1200701786649

熊本縣立人吉高等女學校
創立滿十周年紀念出版

球磨史話

帝國圖書館藏

大正
15. 4. 15
内交

166-361

序

人吉高等女學校創立十周年紀念の爲め郷土史を出版するに當り余に序を求む。

惟ふに郷土偉人の事績を探り郷土文化の淵源を究むるは人生の高雅なる趣味として一般に推奬するに足るのみならず更に是に依りて愛郷の心を養ひ祖先の遺業に對する感恩の念を起すに至らば其の功や頗る大なるものあらむ。

猶又郷土の流風遺俗を究め其の長短を知り敎育の參考に資するが如きは重要なる意義を有するものと謂ふべし。

余は本書の出版を喜ぶと共に更にこれが動機となり今後郷土に關する各種の研究業績の發表を望むや切なり。

聊所感を述べて序と爲す。

大正乙丑仲春

熊本縣知事　佐竹義文

序言

此の書は本校生徒に一通り鄕土の歷史を知らせる爲めに編纂したもので、丁度今年本校創立滿十周年に當るのを機こして印刷に附した。

球磨の歷史には、相良家に關する史書に、歷代參考・歷代私鑑・探源記・南藤蔓綿錄・嗣誠獨集覽等があるが、いづれも寫本で一部の人々に秘藏され容易に手にし難い、又田代政鬴の名著求麻外史の版本はあるが、漢文の爲め少年少女には讀みにくい憾みがある。

本書は是等の書を參考して、簡單平易な球磨史の記述を試みたに過ぎない。强ひて前書に較べて本書の異なる點を擧げれば、最近史學の研究の業績を多少採り入れ得た事こ國史全般の推移こ鄕土史この關係に留意して記述した事こであらう。

若し本書が學校に於ける國史學習の參考こなり、又一般人士の鄕土史に對する興味誘發の機緣こもなり、更に又鄕土愛護の心及び祖先の遺業に對する感恩報謝の念を涵養する一助こもならば、望外の幸である。

本書の編述に就いては、本校全職員の各種の協力に待つ所が多かつたが、全文の執筆には私が當り、大里忠相氏は字句の修正を、山本敏之氏は寫眞撮影を各擔當し、犬童信藏氏は口碑傳說及び遺跡の調査に助力された。

尙米良造酒氏の令嗣米良以平氏、球磨外史著者の令孫雨森眞氏、相良家史料編輯を掌る淵田卯三郎氏から、多大の指導と暗示とを與へられた事を厚く感謝する。又圖版に關しては、遠山三童氏、遠近寫眞館、くらぶ寫眞館の好意を受ける事が甚だ多かつた事を深謝する。

大正十五年三月

人吉高等女學校長　美濃部道義

球磨史話目次

第一話　古代球磨の住民……一
第二話　奈良平安時代の球磨……一四
第三話　相良氏の球磨轉封……一六
第四話　征西將軍宮の御西下と相良氏の進退……一九
第五話　亂世の球磨……二九
第六話　獺原の戰と響原の戰……三九
第七話　秀吉の九州征伐と相良氏の苦心……四八
第八話　朝鮮征伐と相良武士の奮戰……五二
第九話　關ケ原の戰と相良氏の奇略……五四
第十話　人吉城……五九
第十一話　相良清兵衞賴兄の末路……六五
第十二話　球磨川の開鑿と幸野溝の貫通……七二
第十三話　習教館と郷義館……八二
第十四話　丑歲騷動……九五

圖版

第一圖　大村横穴附近發見蕨手刀……關係史話　第一話
第二圖　大村横穴第十一號入口……第一話
第三圖　大村横穴第七號側壁彫刻……第一話
第四圖　西村横穴第一號入口……第一話
第五圖　矢瀬主馬佑墓……第三話
第六圖　矢瀬津留附近之胸川……第三話
第七圖　征西將軍宮御書……第四話
第八圖　人吉城古圖……第十話
第九圖　人吉城趾……第十話
第十圖　織月石……第十話
第十一圖　人吉城趾及球磨川胸川合流點……第十話
第十二圖　城趾より眺めたる人吉町……第十話
第十三圖　牢兵衛殿石……第十一話
第十四圖　日野佐一父子墓……第十四話
第十五圖　球磨川亀割……第十二話
第十六圖　幸野溝隧道入口……第十二話

目次終

第一話　古代球磨の住民

球磨に於ける古代住民の事を述べるのは、日本の古代民族について、學界に定説のない今日、頗る困難な事ではあるが、又興味も深い研究である。

日本の古代民族の中で最初に現はれたのは、石器時代民族で、其の次に北に蝦夷、南に熊襲が現はれ、最後に高天原から渡來した天孫民族が現はれた。蝦夷は九州に關係が無いから除いて、他の民族について述べよう。

（一）　石器時代の住民

石器時代の住民

我國の内で、南は沖繩の諸島から、北は千島の列島に至る諸地方の平原で、地中から、人工の加はつた石だの骨だの、土で造つた器具などが掘り出される。

石器には石斧・石鏃・石匙・石錐・石皿・石棒・石劍・石庖丁・石槌・石臼など大小精粗さまざまの種類がある。骨器には骨針・骨鏃・骨管・骨銛などがある。土器には埦・壺・德利・土瓶・皿・鉢・人形・動物などがあつて、大方色が赤黑く、上縁には把手が附いて、表面には繩紋が見ゆる。

是等の遺物を殘した民族に就ては、アイヌ族の祖先といふ說（小金井良精氏）と、アイヌ以前に我國に住んで居たと想像されるコロポツクル族といふ說（坪井正五郎氏）とがあつたが、現今ではアイヌ說が認められて居る。

然るに、是等の發掘地と同一の水平線或は其れよりも少し上の方から、又別の石器・骨器及赤褐色で直線型の文樣を持つ土器が出て來るのみならず、圓形や瓢形の古墳からも發見され、其性質形式がアイヌ式とは違ふので、特に彌生式（此種の土器が初めて東京市本鄕區彌生町から發見されたから）と呼ばれて、日本人の祖先の遺物だと唱へる說（鳥井龍藏氏等）が起つた。即日本人の祖先も矢張り石器時代から此國に渡來して居た者で、最初に來た日本人の祖先達は、大勢の部隊を組んで來たのでは無く、此所に三人、彼所に五人といふ樣に、一家族とか一部落とかの人々が、連れ立つてあちらからもこちらからも移住して來た。そういふ狀態が長い間續いて、石器時代にも入つて來たし、又金屬器使用の時代にも入つて來た。天孫に降臨し給ふた時は、既に金屬器を用ひた時で、文化の余程進んだ時代までも、引續いて移住が行はれたものである。神話傳說に見ゆて居る國津神は、天孫降臨又は出雲派の神々の渡來以前に此國に土着して居た先移住者と見るのである。更に兩種の石器、土器の分布を見ると、本州に於ては、美濃、越前以北がアイヌ式で、以南が日本人式であり、四國は殆日本人式であり、九州は筑前、筑後が專日本人式で、他はアイヌ式に屬する。要するに、繩紋土器を遺した者は、アイヌ族で、彌生式土器を遺した者は、原始日本人と認めるのである。

以上の諸説から考へるこ、今日球磨郡から發見される石器類は、アイヌの祖先の遺物で、嘗ては球磨の清流のほごりに、骨製の針を垂れ、石鏃を作り、石斧を磨いて、原始の山野に終日狩りくらした平和の姿を、見た時代があつたのである。

然るに、以上の諸説に反對して、縄紋土器を遺した者も、彌生式土器を遺した者も、同一の人種であつて、今日の日本人の祖先の大本をなす者であらうとして其はアイヌに近い者ではあるが、現在のアイヌこは同一ではないこ説く學者（濱田耕作氏等）もある、一説こして記して置く。

熊襲族

（二）熊　襲

石器民族の後に、九州南部に現はれた民族は、熊襲である。熊襲の名義については、諸説あるが、重なものをあげよう。

（イ）熊襲こは、肥後國球磨郡こ大隅國囎唹郡こを併稱したもので、景行天皇御遠征の熊襲の一根據地熊縣（くまのあがた）は、此の邊りを指すのである（青柳高鞆氏）

（ロ）熊襲こは、熊こ襲この二地であらう。熊は隈の借字で、山の隈をいふ、今肥後の南隅なる、大隅こ日向こに接した所に、球磨郡がある、卽山の隈に當つてゐる、是が熊の地であらう。襲は背の借字で、山の背をいふ、今の日向大隅の北隅、肥後球磨郡こ相接する所は、一帶の山背で、皆古の襲の地であらう（重野安繹氏）。

（ハ）東印度ボルネオ島に住むソオ族の、渡來したもので、其勇猛な所から、熊の字を冠したものであらう（沼田頼輔氏）。

右の外にも異説があるが、（イ）（ロ）の二説が、穩當こ考へられて居る。

偖古代の石器民族を征服して、九州南部に繁榮し、球磨郡をも其の重要な根據地こした熊襲こは、如何なる人種であらうか。彼等は長く王化に服せず、大和朝廷の脅威こなつて、景行天皇日本武尊の御征伐こなり、更に仲哀天皇の御征西の原因こなり、兎も角も我が大和民族こは、別種の異民

族として認められて來た者であるが、現今其の系統については、

(イ)南方渡來の人種で、潮流の作用によつて漂着したものであらう(三宅米吉氏)。

(ロ)ボルネオ島ソオ族の移住した者であらう(沼田賴輔氏)。

といふ樣な說がある。

要するに、熊襲が大和民族とは別種の者で、南方系統の人種である事は多くの學者の認める所である。

熊襲の事は、仲哀天皇の御征西後は、國史に見えない。多分全然大和民族に同化したものであらうか。

或學者は、仲哀天皇以後、隼人といふ名で呼ばれて居る九州南部の民族が、熊襲の後身であると說いて居る。一說として附記して置く。

(三) 大和民族

天孫瓊瓊杵尊が、高天原から九州の地に御降臨遊ばされて後、神代三世の間日向高千穗宮にましまして、德化を布き給ふた頃には、我が球磨郡も一時皇化に霑はうたであらう。市房の靈峰に宮柱太しきたてて、球磨一郷の崇敬の中心となつて居る市房神社が、天孫並びに其御系統の神々を奉祀するのも、其深い緣を語つて居るものではあるまいか。けれども、神武天皇御東遷後は、自ら大和朝廷の御稜威も及び難く、殊に神武天皇崩御の後、日向で妃とし給ふた吾平津媛の御腹なる皇子手研耳命と、出雲系の皇后五十鈴媛を母とし給ふ皇子神八井耳命・神渟名川耳尊とが、皇位を爭ひ給ひ、日向派破れて退き、出雲派の神渟名川耳尊立ちて綏靖天皇となり給ふに及び、九州方面との關係は、益疎遠に立ち到つた事と思はれる。

此頃から、景行天皇御親征の頃迄の九州に關しては、國史の記載が中絶して、實狀を知るによしない。ただ僅に、漢土の歷史の記事によつて、朧氣な彼我の交通と九州住民の生活とを、窺ひ得るに過ぎぬ。

是等に依つて推定を許さるるならば、我球磨地方の住民には、大和に赴かずして留まり住んだ高天原渡來の民族も居たであらう、又優勢なる先住の熊襲の子孫も居たであらう。そして彼等が漸次融合同化しながら、朝鮮半島及漢土に通じて、遲々たりとはいへ支那文化の影響を受け、文明の曙を辿つて行つた姿を、想見する事が出來るのである。

近年、筑後及肥後で發見された裝飾のある古墳及横穴の研究は、此時代の住民の生活に關して、興味ある資料を與へるものである。以下學者研究の概要を紹介しよう。

元來古墳及横穴は、奈良朝以前、佛教がまだ流行せず、火葬の行はれなかつた時代に於ける、大和民族固有の墳墓の特稱であつて、古墳は、柩を地平線上に置いて土を著しく高く盛り上げ、形には圓形と瓢形との二種がある。横穴は、凝灰岩或は粘土層の樣な硬くない地質の丘陵の腹部に、横さまに穴を穿ちて、柩をおさめた一種の古墳である。

大村横穴

備筑後、肥後兩國の古墳横穴の中には、其構造や裝飾に於て、他の地方のものに見られない著しい特色を持つて居て、此等の地方が、日本の西陲に在つて、此時代に早くも韓土支那と交通が行はれ、其文化の影響を受けた事の少なからぬ樣子を示すものがある。肥後では、此特色ある古墳横穴の分布が、北は玉名郡高瀨附近から、南は球磨郡人吉附近に及ぶ平地の主なる地方全部に亘つて居る。

（イ）　大村城本横穴群

球磨郡には、裝飾のある横穴が二群ある、卽大村城本の丘陵と、西村京ケ峰とにあるもので、共に同一式の文樣を現はして居る。

人吉停車場の背後にあたる凝灰岩の丘陵村山の南側の崖に掘つたもので、現在は二十個程ある。其内の主なものについて東の方から順に見て行かう。

第四號横穴は、群中の最大なもので、長さ九尺、幅十一尺五寸、高さ四尺八寸ある。其外壁には、楯・刀劍・矢筒の彫刻があつて、昔は皆朱を塗つた痕が見える。

第五號横穴には、入口の上の外壁に、矢筒形が三つ、楯形が一つ彫つてある。

第七號横穴は、群中最興味あるもので、入口の上の廂の外部には、鋸齒狀に小三角形八つを彫り、其上に一筋の線を引いて、右の方に複線で大三角形を一つ彫りつけてある。左の方にも、同形の大三角形を一つ連續させる積りであつたらしい。是等を見ると、法隆寺金堂にある北魏式の天蓋の裝飾に見られる鱗形を想ひ起させる。大三角形の右の方には、矢筒形の浮彫が一つ見える。

此の横穴に續いて、左の方の岩壁に、頗る興味深い一群の形像が浮彫してある。即馬らしいもの一、牛らしいもの三、兎らしいもの一、刀らしいもの一、銅鐸らしいもの二を認める。多分此横穴に葬られた人の、生前所有の財産を現はしたもので、馬は其愛乘したものであり、兎は其愛育したものであらう。

第十一號横穴の外壁には矢筒形三つ、圓形五つ、鞆形一つを彫つてある。

第十五號横穴の外壁には、環狀紋を列べて陰刻してある。是等の横穴の内部から發見した遺物として、蕨手の刀一個と、埦形土器一個とがある(第一號横穴附近に住む犬童節氏所藏)。蕨手の刀は、全長一尺三寸、身部の長さ八寸餘、刄渡一寸、斷面は楔形で、柄部の長さ四寸五分、蕨手の先端には圓い孔がある。身と柄との間に幅二分内外の鍔形がある、柄頭の形式は、稍頭椎に似て居る。元來蕨手の刀は、日本固有の樣式ではなく、恐らくば、支那傳來のもので、更に遡れば、西域から支那に傳はつたものであらう。

埦形土器は、徑約四寸、深さ一寸、普通のものに過ぎない。

（ロ）　西村京ヶ峰橫穴

球磨川の南岸で、川邊川の合流點に近い京ケ峰の懸崖に掘つたもので、二つ列んで居る。現在の入口は、河流から約二十間離れ、水面から二間許りの高さにあるが、此穴を掘つた時代には、球磨川の水面はもつと高くて、崖下に近く淙々の聲をなして流れたのであらう。

第一號橫穴の入口の外壁には、大村橫穴のに似た矢筒形が二つ彫つてある、その一つの上に接して、人物の頭部から頸部を現はした線刻がある、髮はみづらに結つておる樣に見える。

第二號橫穴の外壁には、楯形二つと、刀劍らしい棒狀が刻んである、其他に車輪に似た圓形の彫刻が一つある。

（ハ）　彫刻物の意義

楯・刀劍・矢筒・鞆の如き武器類は、裝飾の意味よりも寧ろ供獻の意味を持ち、且、邪惡を防ぐ護符的の意味をも持たせたものであらう。

圓形の紋樣は、太陽の形を示すもので、太陽を崇拜した古代の民族が、太陽の威德を感じ紋樣に應用したのは、いかにも有り得べき事である。京ケ峯の橫穴にある圓形內に、車輪形の小圓のあるのは、太陽の放線を示す積りではあるまいか。

（ニ）　系統及年代

球磨郡以外の、肥後全部に亘る古墳橫穴をも合せて調査研究した結果、其の構造・裝飾は、今日、北朝鮮及南滿洲等で發見する漢及び六朝の墳墓に類似する點が多く、大陸に近い九州東部地方の住民が、漢土の文化の影響を受けて作つたものと考へられる。

築造の年代は、西曆紀元第六世紀から、第七世紀に亘る頃で、即欽明天

皇から推古天皇に及ぶ時代と推定されて居る。

（横穴に關する記事は濱田耕作氏の研究に據る）

第二話　奈良平安時代の球磨

國造

大化新政以前に、國造を置いて天下を治められた頃、肥後國に封ぜられた國造を擧げると、

崇神天皇の御代に速瓶玉命が阿蘇國造となり給ふた、

景行天皇の御代に三井根子命が葦分國造となり給ふた、

成務天皇の御代に建嶋松命が天草國造となり給ふた、

是等の國造の勢力が、どの位の程度まで、球磨地方に及んだかは知るによしない、ただ阿蘇國造の家だけは、長く續いて、時には其の威風の此の谷までも及んだ事もあつたであらうか。球磨一圓の尊信を荷つて居られる青井神社に、阿蘇の神を奉祀するのも、それらの因緣を語るものではあるまいか。

大化改新

孝德天皇の大化改新に、國造を廢し、國司郡司を置かれた時、初めて上國の一つに、肥後といふ名を見るが、球磨の郡も此の時既に置かれたものであらう。しかし此の僻遠の地に、班田の制をはじめ、租庸調などの新政が、實施されたかどうか疑はしい事である。

奈良朝　平安朝

此の頃から以後、寧樂の都に大陸文化の花咲き匂ふた時代を經て、平安京に藤氏一門が榮華を極め、櫻かざして春の日の短きをかこつた時代まで、我が球磨を治めた人の業績も、治められた民の生活も、共に知るべき史料は絕無である。

平氏との關係

史書に現れた最初の球磨の領主は、平賴盛である。思ふに、平安時代の末、源平二氏對立の頃から、西國に勢力を伸ばした平家は、球磨地方をも其の采邑として領したのであらう。

平家の一門壇の浦に沒落の時、落武者等が球磨の山中に逃れて來たと

いふ口碑が、郡內各地に殘つて居るのも、それらの緣を語るものであらう。即中原村中神には、平重盛の墓と稱するものがある。一勝地村には、千代女の塚、茂田太郎の古蹟と稱するものがあつて、共に平家の落人と傳へられて居る。神瀨村多武除に、平家屋敷と呼ぶ所がある、又同村高澤の中尾山中に、重盛の子孫と稱する者の住居の跡がある。又八代郡五箇莊は、平家落人の隱遁地として有名であるが、彼等の一部は球磨川の谷を遡つて、此所に落ちのびたと傳へられて居る。

史料に乏しい此の時代の球磨に就ては、以上の簡單な記述をなしうるに止まる。

第三話　相良氏の球磨轉封

周頼

相良氏は、藤原鎌足の子孫である。

平安時代の末（天永三年鳥羽天皇の御代）、周頼が遠江國相良莊を領してから、相良氏を名乘つた。

頼景

鎌倉時代の初（建久四年）相良頼景は、球磨郡多良木莊を增賜されたので、相良莊は其の子長頼に讓り、自分は球磨に移住して、湯前、湯山、江代などをも併せ領した。

第一代　長頼

建久九年、長頼は改めて球磨郡に封ぜられ、人吉城に移る事となつた。

球磨は元、平頼盛の所領であつたが、頼盛の死後、鎌倉幕府に沒收されてしまつた。頼盛の城代矢瀨主馬佑は、引續き人吉城に據つて居た。長頼入國の時も、城を明け渡さないので、致方なく長頼は、村山に退いて陣を取つた。やがて木上城主平河義高に頼んで、主馬佑を胸川のほとりに誘ひ出して、だまし討にしてしまつた。

矢瀨主馬佑

主馬佑の殺された所は、矢瀨が津留と呼んで、今も主馬佑及び其の臣下の墓が殘つて居る。尙、後に建てられた藍田大王社及び城內於津賀社は共に主馬佑の祟りを怖れて、其の亡靈を祀つた社である。

そこで、長賴は初めて入城し、第一代の城主となつた。其の後、長賴は鎌倉幕府に仕へて、度々武名を輝かした。

北條時政が畠山重忠を討つた時には、北條義時の軍に從ひ、常に先登となつて奮戰し、槍で額に傷を受けた事もあつた。臣下が、主君の危險を心配して其の鎧の袖をつかまへて止めたが、長賴は聞き入れずに進んだ。その時鎧の袖が切れた、時の人々は、相良の袖切鎧と呼んで、長賴の奮鬪を稱へた。又承久の亂には、北條時房に從つて東海道を進み、更に北條泰時の麾下に屬して宇治川に奮戰した。

第二代 賴親

長賴の歿後、長子賴親が、第二代の城主となつたが、球磨の山中を領するだけでは滿足せず、八代方面の平野に發展する志を抱いた。そこで弟賴俊に家を讓つて、自分は照岳の上に舘を建てて觀仙庵と名づけ、密に力を養つて西侵の機を窺つた。尙此の頃に城下に人吉といふ名を附けたと傳へられて居る。

第三代 賴俊

賴親の志は、第三代の主賴俊に依つて實現された。賴俊は兄賴親の歿後球磨川の下流に歩を進めて、八代郡松求麻地方を領するに至つた。又弘安四年夏、元の大軍來寇の折に、肥後の豪族菊池武房に從つて出征し、その功に依つて葦北郡を與へられたので、水俣に城を築いて沿岸一帶を治めることになつた。

第四話　征西將軍宮の御西下と相良氏の進退

(一)　建武中興と九州の形勢

第四代 長氏

相良氏第四代の主長氏の時代は、後醍醐天皇の御世である。英邁な天皇は、當時北條氏の政道が衰へ、且執權高時が暗愚で、日夜遊宴に耽り、民心漸く幕府を離れようとするのを御覽ぜられて、後鳥羽天皇の御素志を繼ぎ、政權御恢復をお企てになつた。然るに、御武運拙く、遂に隱岐に御遷幸のやむなきに至つた。しかし程なく勤王の義旗は四方に飜つた。當時肥後

では、菊池武時・阿蘇惟直が勤王の兵を擧げ、元弘三年三月、九州探題北條英時の舘を襲つて、官軍の先驅をなした。然るに、筑前の豪族少貳貞經・豊後の豪族大友貞宗が北條氏を助けた爲め勤王軍は破れ、武時は

故郷に今宵ばかりの命とも
知らでや人の我れを待つらむ

といふ悲歌を、嫡子武重に遺して後事を託し討死をした。其の後勤王の軍全國に蜂起して、元弘三年五月、新田義貞の兵が鎌倉に討入り北條氏を亡すや、少貳大友等は大勢を察し、急に勤王方となり、薩摩の嶋津貞久と共に、俄に英時を攻めて自殺させた。

王事に勤めたい希望はあつても、奮鬪するだけの實力を持たない相良氏は、小藩の悲哀を感じつつ、形勢の推移を觀望して居たが、今や素志を果すべき時が來た。元弘三年六月、長氏は、其の子賴廣・祐長・朝氏の三人に兵を授けて筑前に赴かせ、當時太宰府原山に陣せられた皇子尊良親王を擁護し奉り、又少貳氏等と共に、北條氏の余黨討滅に從つた。

かくて九州の騷乱も靜まり、建武中興の聖澤に浴することとなつたが、幾ばくもなく、足利尊氏の叛乱が起つて中央に大動搖を來すと共に、西海の天地も亦大紛乱を生じ、再び修羅の巷と化するに至つた。

建武二年十月、足利尊氏は鎌倉に叛旗を飜し、新田義貞の官軍を箱根・竹下に破り、京都に迫つた。後醍醐天皇は難を比叡山に避け給ふたが、程なく官軍再起して、翌延元元年二月、尊氏は京都を逐はれ九州に逃げ延びた。

當時九州の形勢は如何であつたらうか。

尊氏の叛を聞くや、菊池武重は父武時の志を繼いで、阿蘇惟時と共に新田軍に從つて箱根に奮戰し、弟武敏は九州に殘つて國を守つたが、尊氏西走の報と共に、阿蘇惟直の軍を合せ、肥後を出て筑前に向つた。其の時尊氏は既に赤間關に着き、少貳賴尚を參謀として、徐に九州平定の策を廻ら

して居た。

少貳貞經（賴尙の父）は、太宰府に陣して將に尊氏を迎へて菊池氏に對し一大決戰を開かうとして居た。そこで、武敏は進んで各地に少貳氏の軍を敗り、遂に貞經の籠る筑前有智山城を攻めて、貞經を自殺させ、茲に父の仇を討ち、更に軍容を整へ、博多に進軍して尊氏の來るのを今や遲しと待ち構へた。

延元元年三月二日、愈兩軍は多々良濱に戰つたが、官軍遂に破れて、武敏は敗退し、惟直は討死した。此の一戰に依り、九州の諸豪族は爭うて尊氏の麾下に馳せ參じ、忽にして賊軍は鎭西を風靡する勢となつた。

第五代　賴廣

時に相良氏は、長氏既に隱居し第五代賴廣の世であつた。建武二年、尊氏謀叛の年の暮に、少貳賴尙は尊氏の命をうけ、書を賴廣の嗣子定賴に贈つて出兵を勸めた。しかし相良氏は容易に動かなかつたが終には天下の大勢如何ともする事が出來ないのを察し、少貳氏の招に應じて、足利方に味方する事となり、尊氏の麾下に屬して上洛の覺悟を定めた。

然るに、此の時、同族の內には、全藩の存亡を顧みず、大義に殉じて勤王軍に味方する者もあつた。即賴廣の弟祐長及び一族の經賴は、山田城に據つて義兵を擧げ、遂に官軍に應じて定賴と戰つた。又八代には、內河義眞が勤王の旗を飜した。元來八代莊は、伯耆の勤王家名和長年の子義高が地頭職に補せられた所で、義眞は代官として下向し此の地に住んだ者である。

此の如く、內顧の憂ある上に、進路を遮る強敵を前にした相良氏は、遂に尊氏に從つて上洛する事を斷念せねばならぬ形勢となつた。

尊氏は延元元年四月太宰府を發して、威風堂々と東上の途に就き、湊川の一戰に官軍を破り、遂に京都に攻め入つた。後醍醐天皇は再び比叡山に難を避けさせられたが、やがて吉野に潜幸遊ばされ、此所を暫しの御所と定め給うて、銳意京都の恢復を謀らせられたが、此の後芳山の花開くこと

五十七回、しかも天皇の御素志は遂に永く達せらるゝことが出來なかつた。

後醍醐天皇は、吉野潜行前比叡山におはします頃、官軍の形勢日に非なる様を御覽ぜられ、地方官軍振起の爲め、諸皇子を各地へ御派遣の思召があつた。殊に九州は重要の地であるのに、元弘の變に尊良親王の御下向があつたのみである。そこで、豪邁な懷良親王を征西將軍として御下しになる事となつた。

（二）　征西將軍宮の御下向

親王は僅に十餘人の近臣を從へさせられ、比叡山を發して西國への征途に向はせられた。其の頃、中國筋の陸路は悉く足利方の勢力に屬するので、大和から高野山に出て、紀伊の湯淺港から乘船せられ、鳴戸海峽から瀬戸内海を西に航して伊豫の忽那島に着かせられた。此の孤島に駐まりて形勢を觀望し給ふこと三ケ年に及んだ。御父帝崩御の悲報に接し給ふたのも、此所に御滯留中の事であつた。

偖も指して行き給ふ九州路にて、頼り給ふは肥後の菊池一族であるが、九州の北岸及東岸は少貳大友の勢力に屬し御上陸が困難であらせられたので、日向灘の怒濤をこえて南岸の薩摩へ船出し給ふたのは、延元四年の末つ方であつた。御船が山川港に着いたのが、興國三年五月初で、薩摩に於ける無二の勤王家谷山隆信の住む谷山城に入らせ給ひ、この所をしばしの御所と定め給ふた。

然るに、頼み給ふ菊池氏は、武重、武敏既に世を去り、當主武士（たけひさ）は病弱であり弟武光もまだ年少の爲め、其の勢一時振はなかつたので、親王は近臣を肥後に遣はされ、勤王の將士を激勵し給ふた。かく御活動の御準備の爲めに、六年の歳月は流れてしまつた。正平二年の秋、愈谷山御所を發し、海路肥後に向はせられ、翌三年の正月、宇土に御着の上、惠良惟澄・菊池武光

内河義眞等の勤王軍に迎へられ、御船城に御立寄り遊ばされ、やがて菊池の本城に入らせ給ひ、此所を九州鎭定の御本營と定め給ふた。武光も、今や菊池家の主となり、新進の英才を捧げて父祖の遺業を大成する事となつた。

正平十年から愈九州統一の大活動に入らせられたが、王師の向ふ所敵影を見ず、忽にして肥前・豊後・豊前を定め、進んで筑前を攻めて九州探題一色範氏を驅逐し、北九州は全く官軍に屬するに至つた。正平十三年、大友氏時・少貳頼尙等が再び叛いたが、筑後川の一戰に敗れ、この頃から約十年の間は、親王の御威勢全九州を風靡し、余勢は遠く四國にまでも及んだ。

正平二十二年には、後村上天皇の皇子良成親王が九州に御下向遊ばされた。

第六代定頼

時に相良氏は第六代定頼の代で、正平十二年北朝後光嚴院の宣旨に依つて、從五位下に叙し遠江守に任ぜられた事から察すると、足利方の指揮を仰いで居たのであらう。

將軍義滿を輔けて幕政を執つた室町幕府の名臣細川頼之は、九州の頽勢を挽回する爲めに、手腕ある鎭西探題の選定に苦心したが、遂に今川貞世を拔擢して此の大任を負はせた。

建德二年貞世の西下と共に、九州に於ける足利方の勢力は再び振ひ興り、官軍は漸次敗退の悲運を重ね、十年後の弘和元年には、菊池城陷り、菊池武朝は良成親王を奉じて八代に逃れた。懷良親王は、之より先官軍の敗運漸く兆した天授元年、征西將軍の職を良成親王に讓られて、筑後矢部の山中に御退隱遊ばされた。

第七代前頼

弘和三年四月、良成親王は相良氏に對し球磨及葦北の所領安堵の令旨を賜うて、忠勤を求め給ふた。其の頃相良氏では定頼歿して第七代の主前(さき)頼(より)が立つて居た。父定頼は少貳氏に從つて足利方であつたが、前頼は夙に

勤王の志を抱いてゐたので、今や此の令旨を賜はり、勇躍して官軍の爲め活動する事となつた。

相良家のこの歸順は、今川貞世にとつては意外の出來事であつて、南肥後經略の上に、大なる支障を與へた。之に反して、官軍は頗る有力な味方を得て、此れが爲め、從來今川氏と不和であつた薩隅日の島津氏は、更に今川氏反抗の態度を強め、八代の名和氏も再び起り、官軍恢復の曙光を認める樣になつた。

前頼は島津氏と通じて今川軍の南進を防いだ。其の功に依つて元中二年の春肥前國守護職に補せられ、同年の秋には京都に上り、吉野の御所に參內して後龜山天皇に拜謁を賜はつた。

然しながら、今川氏の根強い壓迫は漸く其の度を増して來るので、勤王の心切なる前頼も、大勢に逆行して一家を危くするに忍びず、今川氏に味方もしなかつたが敢て反抗する事もなく、元中四年以後は球磨の山中に蟄居して、其の活動の跡を見なくなつてしまつた。

元中九年南北兩朝合一の後、今川貞世は島津氏の尚服從しないのを見て、子貞兼を遣はして、相良前頼と共に、日向方面から薩隅を壓迫する計を立てた。前頼は弟頼書・頼成・前成等と日向に進んで都城を守つた。然るに、應永元年正月島津元久の大軍に囲まれ、苦戰奮鬪の甲斐もなく、城は陷り前頼は三人の弟と共に討死した。

第五話　亂世の球磨

足利義滿が室町幕府を開いて以後十三代二百年間は、天下既に一に歸したとはいへ、吉野時代の爭亂尚引續き、將軍は眞に天下を統一する力なく、諸國の守護地頭は各其領地に據つて自立し、上下の秩序全く壞れ、人倫は頽廢し、大は小を併せ強は弱を呑む亂世となつた。

相良氏は、第八代實長（さねなが）から第十八代義陽（よしひ）に至る時代で、骨肉相戰ふ內訌

や、所領爭奪の外戰に、平和の日とては殆見ることが出來なかつた。

此の血汐に彩られた淺ましい世の推移を、代を追うて略記しよう。

第八代實長
第九代前續

（一）第八代實長及び第九代前續の世

吉野時代に於ける宮方武家方の餘黨が尙殘つて居て、戰爭のやむ日とてはなかつたが、實長は、嗣子前續の夫人として薩侯島津豐久の女を迎へ前續も、益々島津氏と聯盟を固くして領土の安泰を計つた。

第十代
堯頼

（二）第十代堯頼の世

京都で、將軍義教が赤松滿祐に暗殺された嘉吉の亂のあつた年から七年目に當る文安五年に、相良家に大内訌が起つた。

相良氏の一族で上相良氏と呼ばれた多良木城主頼觀は、弟頼仙と共に、宗家押領の謀叛を起し、一夜人吉城を襲つて火を放つた。不意の襲撃に城中は大狼狽をきはめ、十六歳の城主堯頼は薩摩菱刈に逃れ、城は逆臣の手に陷つた。然るに、同じ一族の山田城主長續は、直に頼觀を逐つて亂を平げ、第十一代の城主となつた。一方堯頼は、亂後歸國の途中、急に歿してしまつた。

第十一代
長續

（三）第十一代長續の世

此の時代に、相良領として薩摩牛屎院と八代高田郷とを加へた。

牛屎院は、薩摩國伊佐郡大口、山野、羽月三村の總稱で、大口城に據つた牛屎氏の所領であつた。長續は、菱刈の領主菱刈氏と兵を併せて、寶德三年の春大口城を奪つた。後、薩侯嶋津忠政も菱刈氏及び眞幸の北原氏等の豪族を牽制する事を長續に依頼して、其の占領を承認した。

八代には、正平十三年名和義高の子顯興が、伯耆から一族を引連れ菊池武光を頼つて移住し、下益城郡豐福城をも併せ治めた。顯興五世の孫長利

の歿後內亂の起つた時、十三歲の嗣子顯忠は、長續を賴つて人吉に逃れて來た。長續は憐んで川邊村に住ませ、厚く庇護したので、亂が平いで歸國の後、高田鄕を割いて恩に報いた。

長續の晚年には、京都で應仁の大亂が起つた。長續は、五十七歲の老軀を提げて遙々と上洛し、細川勝元に味方して戰つたが、翌年病の爲め歸國し、程なく歿した。

第十二代 爲續

（四） 第十二代 爲續の世

爲續は、歌人として天下に名を擧げたと共に、相良氏の領土に空前の擴張を加へた人である。其の領土の一は八代で、他の一は豐福である。

先代長續の時、好を修めた八代の名和顯忠は、文明十二年爲續の女と婚を約して親交を重ねた。然るに、文明十四年、薩摩內亂の爲め、爲續が島津氏の加勢として牛屎院に出陣した不在中に、顯忠は突然高田鄕を襲つて奪ひ取らうとした。爲續は顯忠の忘恩不信を怒つて、八代の麓城を攻め、遂に之を占領した。

八代を逐はれた顯忠は宇土に奔り、宇土城主宇土爲光を亡して此所に據り、宇土郡及び飽田・益城兩郡の一部を領する事となつた。

長享元年、爲續は更に北に進んで名和氏の領する豐福城を攻めて奪ひ取つた。

然るに其の後菊池家と不和を生じ、明應八年菊池能運の南侵に會ひ、先づ豐福を奪はれ、續いて八代も陷り、折角の雄圖も空しく消え失せて、此れから後は專ら內を守る策を採り、牛屎院までも島津氏の手に委せ、球磨葦北の守備に力を注いだ。

第十三代 長每

（五） 第十三代 長每の世

長每は、父爲續の武勇と文才とを其のままに承け、父の代に失つた八代・

豊福の恢復を志した。

當時八代・豊福は、菊池氏の保護の下に再び名和氏の所領となつて居た。長毎は先づ菊池能運と和睦して、その諒解の下に三度八代城を攻め、永正三年遂に顯忠を逐うて再びその所領とした。豊福も幾度か攻め幾度か敗れたが、結局永正十三年に至つて漸く舊領を恢復した。其の後豊後の大友義鎭の仲裁を容れて、宇土の名和氏とも和睦するに至つた。

第十四代 長祇

（六）第十四代 長祇の世

長祇は、人倫紊亂の世に於ける痛ましい犠牲者となつて、短い生涯を送つた人である。

長祇十八歳の時、父長毎歿して其の後を嗣いだ。當時肥後一帶は菊池氏全く勢を失ひ、大友義鎭の勢力に屬し、長祇は義鎭から八代及び豊福領有の券書を受けて、父の遺領を治めた。

大永四年長祇二十四歳の夏、一族の相良長定反して不意に人吉城を攻め、長祇は薩摩出水に逃れた。長定は第十一代長續の孫で、其父頼金が長續の長子であつたのに、病の爲め家を嗣がなかつたのを遺憾に思つて、遂に自立するに至つたのである。

かくて長定は第十五代の城主となつたが、骨肉を逐うて尚滿足せず、なほも薩摩に亡命した長祇を欺いて水俣城に迎へ、暗殺を企てた。長祇之を知つて潜に城を逃れて山中に匿れたが、更に捜して遂に自殺させ、首を献ぜしめて漸く滿足した。

第十五代 長定

（七）第十五代 長定の世

骨肉の人を殺す殘忍を敢てした長定は、忽其の報を受けねばならなかつた。

非命に仆れた長祇の庶兄僧瑞堅は、大永六年五月復讐の兵を起して人

吉城を陷れた。長定は自立後僅に二年で城を逐はれ、妻子と共に八代に逃げ、後に葦北に移り、更に筑後に放浪の旅を續ける事五春秋に及んだが、故郷忘れ難く、享祿四年の秋なつかしい鄉國の山河を訪うた所を、長祇の庶兄義滋の爲め、妻子と共に殺された。彼も亦時代の生んだ犧牲者の一人であつた。

（八）第十六代 義滋の世

第十六代義滋

長定沒落の後殊勳者瑞堅も其の兄義滋のため逐はれて自殺し、義滋立つて第十六代の城主となつた。

折しも日向眞幸の城主北原氏は、相良家の內訌に乘じて、大永六年七月急に大兵を出して人吉城を囲んだ。城兵は中河原にまで突出して奪戰したが、容易に擊退する事が出來なかつた。此の時、藍田祐玉寺の僧樹薰は年十八に過ぎなかつたが、義滋の密書を受け、之を油紙に包んで首にかけ、敵の重囲を脫し、球磨川を泳ぎ下つて矢黑の淵に着き、山傳ひに間道から皆越に行つて、漸く地頭皆越貞當に求援の書を屆けた。貞當は其の夜の內に兵を送り、城中に向つて日向伊東家から加勢に來たと大音あげて呼ばはらせた。之を聞いた眞幸軍は大に驚いて、明方までに悉く囲を解いて退いた。

其の後、球磨の地方も稍小康を得たので、義滋は天文三年に八代鷹峰（麓城の一部）に新城を築いて移り住み、やがて胸中の經綸を實行する機會を捕へた。彼は天稟の外交手腕を振つて、近隣の諸豪族と和平修好の策を講じ、自巳の領土の安寧を圖ると共に、南九州一圓の平和の維持者として活動した。今その概況を記さう。

天文二年長女を、堅志田城主（下益城郡）阿蘇惟前に嫁がせた。

天文四年宇土城主名和武顯の女を、世子晴廣の夫人として迎へた。

天文七年薩侯島津貴久の來訪を、佐敷に迎へて厚くもてなした。

天文九年女婿阿蘇惟前を八代の鏡に迎へた。

同年肥前侯龍造寺隆秀の來訪を、日奈久溫泉に迎へて親交を結んだ。

天文十一年菱刈城主で次女の嫁した菱刈重任を水俣に歡迎した。

天文十四年出水城主阿久根彈正を八代に迎へた。

同年勅使大宮伊治を鷹峰城に迎へ、從五位下に叙せられ 宮內少輔に任ぜられた。

第十七代 晴廣

（九） 第十七代 晴廣の世

晴廣は上村城主賴興の子で、義滋の養子となつた。

晴廣の一代は、父の餘威に依つて領內も小康を得、又四隣の諸侯とも益々親交を重ね、戰亂の世に珍らしくも平和の年が續いた。

しかし其の子義陽が十二歲で第十八代の城主となつた時、恐しい內憂外患が相良家を襲つた。それは話題を改めて述べる事にしよう。

第十八代 義陽

第六話 獺原の戰と響原の戰

戰國の豪傑としての健鬪と、其の悲壯な最期とに於て、相良七百年の史上に最大の光彩を放つ者は、第十八代の主義陽の一生であらう。

義陽は晴廣の長子で、弘治元年父の歿後家を嗣いだ。其の時年十二に過ぎなかつたので、祖父に當る上村城主賴興が政を輔けたが、早くも彼の將來の運命を暗示する樣な不幸な出來事が引續いて起つた。

近親反亂

（一） 近親の反亂

弘治三年賴興が歿すると共に、十四歲の少年公子の周圍には、骨肉相鬩の陰謀が企てられた。即叔父上村城主賴孝（賴興の子）●從祖父豊福城主賴堅（賴興の弟）●及び岡本城主稻留長藏の三人が心を合せて、義陽を仆し所領を三分しようと計つた。

義陽はまづ豊福の頼堅を平げ、次に頼孝・長藏を討つて日向に走らせ、漸く内亂を鎮めた。

獺原の戰

（二）　獺原の戰

義陽十六歳の永祿二年には、老臣間に大内訌が起きた。當時の重臣に東長兄・丸目頼美といふ者があつた、共に義陽を輔けて政を執つたが、たまたま二人を離間する者があつて遂に相戰ふに至つた。

東長兄は、早くも義陽及び其の母を赤池城に迎へて有利な立場を作り、丸目頼美を叛臣と呼んで其の邸を燒討にした。機先を制せられた頼美は、姻戚に當る湯前城主東直政の許に走つて相對峙するに至つた。かくて兩軍は奥野（久米村）・牧原（湯前村）・多良木の各地に會戰したが、獺原（黑肥地村）の決戰に、湯前軍破れ直政は討死し、頼美は日向に走つて、三箇月に亘る内亂は漸く終を告げた。

水俣落城

（三）　水俣の落城

永祿六年領内の安定を見定めた後、義陽は日向侯伊東祐丘と親和を約して後顧の憂を絶ち、峽中を出て八代城に移つた。同時に、虎視眈眈北上の機を狙つて居る南方の雄島津義久に、使を送つて敬意を表する事をも忘れなかつた。島津氏は從來も屢肥薩の國境地方に出兵したが、相良氏とはただ小競合を行つたに過ぎなかつた。然るに義久は天正六年日向の伊東祐丘を逐うて之を併せ、更に祐丘救援の爲め南下した大友義鎭を耳川に敗走させてから、其の鋭鋒は漸く轉じて肥後に向つた。此の年の秋義久は、弟義弘に兵を授けて宇土城を攻めさせ、城主名和顯孝を降した。名和氏は天文の頃から大友義鎭の麾下に屬したが、玆に形勢は一變して島津氏に從ふ事となつた。

今や危機は既に相良家にも迫つて來た。鷹峰城頭に立つて、無慙な降服

頼安は休矣と號す

の恥を受けた北方の僚友を弔ひつつ、更に南天に湧き出る妖雲を眺め、自家の運命に想ひ到つた時、義陽の感慨果して如何であつたらうか。

天正七年以來、連りに相良領に偵察戰を試みて居た島津氏は、翌八年愈義弘、家久を將として、水陸の軍を發し葦北郡湯浦及び佐敷の占領を企てたが、漸くにして退ける事が出來た。

天正九年義久大擧して水俣城を囲んだ。城將犬童頼安固く守つて屈しなかた。折しも薩將新納忠元から

秋風に水俣落つる木の葉哉

と記した矢文を送られたがすぐさま、

寄せては沈む月の浦波

と記して射返したほどの餘裕を示したが、大勢はもはや如何ともする事が出來なかつた。八代に在つた義陽は、これ以上戰ふのは相良家に不利な事を悟つて、頼安に開城を命じ、水俣を島津氏に與へ、葦北の兵を悉く退けて和を講じた。

此の籠城の際城將頼安の嫡子熊徳丸は、十四歳の少年で人吉城内延命院の稚兒となつて居たが、父の急を聞いてただ一人寺を忍び出で、水俣城に馳せつけて父と共につぶさに籠城の苦を嘗めた。此の少年こそ後年相良家の名臣として名を殘した相良清兵衛頼兄である。

響原の戰

（四）響原の戰

京都では室町幕府既に亡んで、織田信長が天下統一の歩を進めて居た。九州の形勢を見るに、肥後の菊池氏、筑前の少貳氏は全く衰へ、豊後の大友氏、肥前の龍造寺氏、薩摩の島津氏が勢を得て鼎立の姿であつた。其の勢力の及ぶ所を見ると、大友義鎮は豊前・豊後・筑前・筑後・肥後等九州の大半に威を振つた。龍造寺隆信は肥前・筑後・肥後に伸びて大友・島津と勢を爭つた。島津義久は薩摩・大隅を領し、更に伊東氏を逐つて日向をも

併せた事は前に既に述べた。

然るに、大友氏は日向耳川の戰に敗れた後は、肥後に於ける名聲殆地を拂つてしまつた。島津氏が宇土城を奪つたのも、此の形勢に乘じたのであつた。今や義久は名和・相良兩氏を從へ、進んで大友氏の本據を突かうとして起つた。天正九年水俣落城後直に義久は相良氏に大友征討軍の先鋒を命じ、まづ其の進路を妨げる阿蘇氏の宿將御船城主甲斐宗運を破ることを托した。

相良家は義滋以來阿蘇家と親交を結び、從つて甲斐氏とも親しく、晴廣は宗運の父親宣と殊に親密であつた。義陽も亦宗運と和親の誓書をとり交はして居た。今や此の強要を受けるに當つて、相良の封土を全うする爲めには、神明を欺き信義を破る罪を一身に負うて、島津氏の命に從ふより外に採るべき道は無かつた。そこで義陽は八代妙見宮に死を以て瀆神の罪を贖ふべき願文を奉納し、天正九年十二月一日の曉、悲壯な出征の途に上つた。小川（八代郡）の守山を過ぎる頃、義陽は馬上に口ずさんだ、

守山のおろす嵐のはげしくて
　明しかねたる雉の聲々

決死の戰場に急ぐ彼が胸中の哀音を、さながらにきく思ひがする。

やがて娑婆神峠（下益城郡小野部田・豐野二村の境）に陣し、兵を分つて甲斐方の堅志田・甲佐の二城を攻めて陷れ、進んで響原に陣を移し、今日の勝利の祝宴を催した。

甲斐宗運は御船城を出て響原に到り、敵の油斷を見すまし、谷傳ひに間道を廻つて相良軍の背後に迫り、急に襲ひかかつた。相良軍は不意を打たれて狼狽し、亂軍の内に義陽は討死し殘兵はちりぢりになつて落ちて行つた。

宗運は義陽の首を得たが、さすがに今度の戰が義陽の眞意でない事を知つて、其の苦境に同情すると共に、島津氏に對する緩衝地帶を失つた自

家將來の運命に思ひ及んで、勝利の悲哀をしみじみと感ぜざるを得なかつた。義陽の首は直に相良陣に送り返され、やがて八代城の麓に葬られた。

突如東天に現れ、陸離たる光芒を殘して西空に消え行く彗星にも似た、花やかに惜しき三十八年の生涯。力是正義の亂世に生れながらも、信義と利害と脅威との間に一家存亡の責を身に負ひ、懊惱の末は死に安住を求めた彼の淋しい心境。誰か涙なくして想ひやる事が出來よう。

（五）義陽の歿後

義陽歿後

義陽敗死の報を得た島津義久は、遠慮なく進んで八代を自領に收めた。尚當時、島津氏がやがて球磨をも併せ治めるといふ風評が聞えたので、領内の人心恟々として安き心とてはなかつた。幸にして犬童頼安・深水宗方の二名臣が、よく力を協せて遺孤を輔け難境に善處した。即天正九年十二

第十九代忠房

月義陽の長子十歳の忠房を立てて第十九代の主と仰ぎ、次子八歳の長毎を人質として薩摩に送り、義久から相良家安泰の保証を得たので、人心始めて落着く事を得た。

義陽の弟頼貞は豫て兄と不和で、薩摩の栗野に住んで居たが、義陽の戰死に乘じて球磨に侵入し反亂を起した。

頼安・宗方は島津氏に訴へ、義久の力に依つて頼貞を國外に退かせた。此の頃湯山（水上村）の地頭湯山宗昌が、弟普門寺（水上村岩野）の僧盛譽と共に、頼貞に味方したと詐り告げる者があつたので、忠房は領内の士に誅罰を命じた。其の後無實の事が分り、誅罰中止の使者を送つたが使者は途中免田の茶屋で酒に醉ひ、多良木まで行つて泊つた。其の夜普門寺は襲はれた。宗昌は逃げたが、佛道の修行深く高徳の聞え高かつた盛譽は、死生を超えて壇上に跪坐し、香を焚いて經文を讀誦して居た。士卒等は無慙にも此の忍辱の高僧を斬つた。翌日使者が驅けつけた時は既に遲かつた。

愛子が罪なくして殺されたのを悲み且怨んだ盛譽の母は、市房神社に詣でて斷食を行ひ、左右の指を切つて血を駒犬に塗り、盛譽の敵を呪咀した。又伴うた飼猫にも血をすすらせて祟りを賴んだ後、茂間崎の淵（水上村湯山字隱舘）に身を投げた。其の後程なく、盛譽を斬つた士も、酒に醉つた使者も急病で死に、又相良家にも怪しい事が起つたと傳へられて居る。其の爲め慶長二年長每の代に、青井神社の西脇に小祠を建てて、盛譽及び老母の靈を祀り、慈悲權現と呼んだ。更に寛永二年の頃、母子の靈と共に猫の靈をも慰める爲め、長每は普門寺の故地に一寺を建立して、善生院と名づけた、俗に猫寺と呼んで居る。

第七話　秀吉の九州征伐と相良氏の苦心

島津氏の豐後侵入

全九州統一の大望に燃えたつた島津義久は、天正十二年三月肥前に侵入して龍造寺隆信を仆し、尋いで其の鋭鋒を豐後の大友氏に向けた。

第二十代長每

此の年、相良氏は忠房歿して薩摩に人質となつて居た弟長每が年十二で第二十代の主となり、八歳の弟長誠が代つて薩摩に赴いた。

天正十三年十月、島津義久及び弟義弘は本軍を率ゐて阿蘇から進み、義弘の子家久は別軍を率ゐて日向から進んで豐後に攻め入り、翌十四年には、大友義鎭及び其の子義統は居城を逐はれた。此の時深水宗方・犬童休矣は義久に從つて各地に轉戰した。

大友義鎭及び龍造寺政家（隆信の子）は、當時關白となつた秀吉に救助を請うた。

秀吉西下

秀吉も豫て九州征伐の志があつた上、前に島津氏の爲め日向を逐はれた伊東祐丘が秀吉に仕へて舊領恢復を願つて居たので、天正十五年三月自ら二十五萬の大軍を從へて征途にのぼつた。

やがて秀吉は兩筑を平げて肥後に向ひ、弟羽柴秀長は別軍を率ゐて豐後から日向に進んだ。

大友氏を逐うて豊後を占領して居た義弘・家久も、此の大軍には敵し難く、兵を肥後日向の二方面に分けて退却する事となつた。其の時豊肥の諸豪族は、從來島津氏に苦められた仇討の爲め、又秀吉の歡心を得る爲め、至る所に島津軍の歸路を遮ぎつたので、非常な苦戰に陷つた。當時宗方・休矣の率ゐる相良軍も、辛うじて危機を脫し、阿蘇を越えて歸國する事が出來た。

長每は島津氏に對する申譯に犬童休矣を從へて日向に出兵したが、同時に深水宗方は、長每の弟長誠を奉じて八代に赴き、秀吉に謁して服從の意を表した。秀吉は相良家所領の安堵を保証したので、直に日向出兵中の長每に急使を送つて退陣させる事になつた。

此の如くにして相良家は宗方の機敏な局面轉廻に依つて、危機を脫し一家の安泰を保つ事が出來た。

秀吉が佐敷に着いた時長每は宗方・休矣を從へて其の陣に伺候し、重ねて舊領安堵の命を賜はつた。

天正十五年五月秀吉が薩摩に入ると程なく、義久は降服した。宗方は本陣に伺候して祝歌をたてまつつた。

草も木も靡き從ふ五月雨に
　天の惠みは高麗百濟まで

秀吉は宗方が幼主を擁して難局を切りぬけねばならぬ苦衷に同情すると共に又一方彼の敏捷と機智とにも感嘆を止め得なかつた。そして大阪へ伴ひ歸らうとしたが、宗方は幼主に身を捧げて義陽・忠房の知遇に報ゆる爲め、遂に此の榮達を辭退した。

秀吉が歸途八代を過る時長每は再び赴いて關白の御機嫌を奉伺し、尙弟長誠・宗方の義子賴藏・及び休矣の娘を人質として大阪に遣した。

長每十九歲の天正十八年には義陽歿後十年の間相良家の柱石となつた宗方・休矣は退隱して、宗方の子賴藏が家老となり、休矣の子賴兄が之を

輔ける事となつた。

程なく宗方は歿したが最期に當り

我が墓は必南面せしめよ。死して南敵を防がん

と遺言して島津氏に對する年來の胸中の忿懣を洩した。墓は中尾山に在つて、今も南天を睨んで立つて居る。

第八話　朝鮮征伐と相良武士の奮戰

文祿の役

秀吉が九州征伐に際して筑豊の間に轉戰の折、戰塵を箱崎の濱に洗ひ、博多灣頭に立ちて相模太郎の雄圖を追想した時、胸に燃え上つた大明國遠征の遠望は、時來りて遂に天正十九年の征韓令となつて現れた。此の布令に依れば、諸侯の率ゐる出征の兵凡十三萬人を九隊に分ち、順次に出發させた。相良長每は、鍋島直茂と共に加藤清正の率ゐる第二番隊に屬する事を命ぜられた。

文祿元年三月、長每は、深水賴藏を總大將とし犬童賴兄之を輔け、兩人に相良の姓を賜はり、兵八百人を從へて肥前の名護屋に赴き、四月清正に從つて釜山に上陸した。かくて五月京城占領の時は先頭第一の名譽を荷ひ、更に咸鏡道に向ひ、六月永興を陷れて直茂と共に其の守備を命ぜられた。清正は手兵を率ゐて會寧に進み、朝鮮の二王子を擒にし、尙も北進を續け兀良哈(おらんかい)にまで到つた。

十月長每は安邊城の守備に轉じた。此の時敵兵大擧して長每の城を包囲したが、孤軍よく奮鬪して敵を退け、後日清正をして大に感嘆せしめた。

文祿二年二月、命に依り清正に從つて京城に歸り、六月晋州の戰に敵軍を包囲して奮戰の際、長每は足に傷を受けた。

やがて和議が整ひ、文祿三年春諸將は歸國の途についたが、長每は尙止まつて西生浦(蔚山の南)を守つた。

慶長元年五月淸正撤兵の時、始めて歸國する事となつた。

兩家老賴藏・賴兄は出征の初から不和であつたが、歸國後賴藏は相良家を去つて、其の後加藤家に仕へる事となつた。此の頃から賴兄が專ら家老として威を振ふに至つた。

慶長の役

慶長二年朝鮮再征の命が下つた時、長每は黑田長政の率ゐる第三番隊に屬して出征し西生浦・釜山・唐島・南原・蔚山等に轉戰して功を立てたが秀吉の薨去と共に退軍する事となり、慶長三年十二月博多に着いた。此の時朝鮮人の捕虜數十人を連れ歸つて城北に住まはせ唐人町と名づけた。此の唐人町は今の人吉町二日町の內で本願寺別院の邊から七日町に至る迄の區域に當つて居る。又陶工をも伴ひ歸つて上村に住まはせた。上村永山鶴田光平氏邸內に當時の竈の跡が殘つて居る。

第九話　關ケ原の戰と相良氏の奇略

相良氏は吉野時代以來大勢力の間に挾まれて、去就に苦む小藩の悲哀を屢感じたが、常に巧妙な進退に依つて危機を脫し、所領の安泰を維持し得た。此の点に於て相良家歷代の君臣の手腕は、他の諸侯の追隨を許さゞるものがあつた。其の中でも關ケ原の戰に於て家老相良賴兄が畢生の智能をしぼつた腕の冱は、相良外交史中の尤なるものであらう。

慶長三年八月秀吉の薨じた後、長い間隱忍自重して居た德川家康は漸く其の鋭鋒を表して來た。

石田三成擧兵

豫て秀吉の信任の厚かつた石田三成は、豊臣氏の爲め家康を除かうとして、上杉景勝・宇喜多秀家・毛利輝元等と結んで、東西一時に兵を擧げ、家康を夾擊しようと企てた。慶長五年先づ上杉景勝が會津で兵を擧げた。家康は此の年六月鳥居元忠に伏見城を守らせ、自分は諸將を率ゐて東征の途に上つた。三成は此の虛に乘じて兵を起し、西國の大名等を招いた。島津・鍋島・小西・長曾我部を始めとして大小の諸侯は殆皆之に應じた。相

相良氏出兵

良氏も大勢に順應するより外途がなかつたので、長毎は西軍に從つて出征し、鳥居元忠の守る伏見城を攻めた。しかし此の天下分目の大戰に、勝敗はもとより豫測し難い。是に於て、相良一流の巧妙細心な暗中飛躍が行はれた。卽ち長毎は伏見城包囲中に密使を德川方の井伊直政に送つて內應の書を屆けさせた。其の書には、

相良家の奇略

相良家は夙に家康の麾下に馳せ參ずる覺悟で大阪まで來た所を、西軍の爲め妨げられ今は致方なく伏見城攻擊に參加はするが、東軍西上の日には必ず戈を倒にして德川方に從ひ、死力を盡して二心のない事を明にするのであらう。願はくば家康に此の意を披露されたい。

といふ趣意を記した。

使者は下總國古河に到つて、此の書を直政に渡し、更に家康から嘉納の意味の返書を受け取つて歸つた。

今や西軍が敗れても東軍が負けても、相良家の運命は安全の保證が附けられた。

伏見城陷落の後、相良氏は石田三成に從つて美濃國大垣城を守つた。慶長五年九月十四日の夜、三成は諸將と共に關ケ原に出陣して、東軍を迎へ擊つ事となつた。

大垣城は三成の妹婿福原直高が守り、相良軍は城內三の丸の守備に當つた。

九月十五日乾坤一擲の決戰は關ケ原に於て行はれ、西軍大敗の報が早くも大垣城に達した。

相良軍の內應

今は相良家の態度を鮮明にするも不安のない時期となつた。否一時も早く東軍に誠意を通ぜねばならぬ時となつた。一刻も猶豫を許さない。長毎は、其の日の內に密使を關ケ原なる井伊直政の許に遣つて、大垣城の守將福原直高等を斬つて誠意を示したき故、檢分の爲め麾下の士一人を派遣されたいと書き送つた。翌十六日直政から嘉納並に激勵の返書が

來た。此の暗中飛躍の主動者は、實に家老賴兄であつた。更に彼の凄い腕を振ふべき時が來た。

十七日東軍の一部が關ケ原から來て大垣城を囲んだ。賴兄は守將直高を輔ける三將垣見家純・熊谷直陳・木村宗左衛門にむかひ、城外の竹林が敵を防ぐに不便故伐り拂ひたければ、共に檢分して指揮を請ふと詐つて城外に誘ひ出し、伏兵を備へて突然三將を斬り殺した。それから東軍の將水野勝成を導いて本丸を攻め、守將直高を逐つて遂に城を陷れた。

此の如くして相良家は、德川氏から所領の安全を承認された。長每は祿五百石を加增して賴兄の殊功に報いた。賴兄は此の役から清兵衛と稱した。

賴兄の父休矣は、鄉國に在つて遙かに其の子の功名を聞き、一門の繁榮を樂みながら老を養つて居たが、慶長十一年十一月八十五歲の高齡で世を去り、深水宗方の眠る中尾山と、谷を隔てて相對する富尾山に葬られた。此の時休矣恩顧の臣七人殉死して休矣の墓側に葬られた。

第十話　人吉城

（一）位置

人吉城は、肥日兩國を境する九州南部山脈中の矢嶽峠から、北の方人吉盆地に向ひ四里餘に亘つて起伏する藍田中央丘陵の末端の斷崖上に築かれた城で、北は球磨川の深潭に守られ、西は胸川が濠の如くに繞つて城の西北隅で本流に合し、東は七地の凹地と鳩胸川の峽谷とに臨み、四周共に近づき難い斷崖の切り立つた要害堅固の地である。

城の下流小股大股の橋上に立つて眺めよ、木山淵を覆ふ鬱蒼たる森の姿、激流に沿うて蜿蜒たる城壁の趾、更に天を摩して球磨の平野を睥睨する山砦の雄姿、規模こそ小なれ彼の要害此の形勝、眞に天下の名城たるに恥ぢぬであらう。

（二）築造

人吉城は本丸・二の丸・三の丸・總曲輪から成り、本丸は東南に在る最高點で一に高御城と云つて居る。二の丸は本丸の西で稍低く、三の丸は二の丸の西及北を繞つて居る。總曲輪は、三の丸の西から球磨川及胸川の岸までを包む一帶の平坦な區域である。

尙以上を中央丘とすれば、是に對する外輪山にも比すべき要地が、小谿を隔てて接續して居る、即東方の木山・原の城、南方の中の城・上の原と稱する丘陵で、更に中の城及上の原の南麓に沿うて空濠が掘り廻されて居る。

更に、此外輪丘の南方一帶に亘る丘陵の起伏出入と、谿谷山逕の錯綜複雜の狀は、眞に自然の迷路とも稱すべき地形で、籠城の際などには屈竟の隱れ家であつたらう。

尙又原の城の東麓には、谿流を堰き止めて一帶の湖水を造る爲めの關門の遺趾さへ窺ふ事が出來る。

此城の築かれた始は明かではないが、初めて史書に現はれた人吉城主は、平賴盛の臣矢瀨主馬佑で、その頃にはただ天嶮を利用した山砦に類したものであつたらう。

相良長賴が主馬佑を亡して城主となつてから、正治元年正月三日に築城の工を起した、其時城の西南隅から三日月形の紋ある石を得たので、繊月城と名づけられたと傳へられて居る。

第十八代義陽の時、邸宅を改築する豫定で計畫だけ出來たが、響原の戰に討死をした爲め、中止となつた。

第二十代長每が立つた天正十三年の頃から、愈大規模の築城が企てられた、日本の築城法に革命期を劃する種子島鐵砲傳來は、實に是に先立つ事四十二年で、新式築城の始と云はれる近江安土城の造營に後るること

九年である。

(イ)本丸方面の築造。 天正年中豊後國から石屋を招き石垣の普請を始め、南に溜池を掘り三方の石垣を築いたが、朝鮮征伐の風聞があつたので中止した。

文祿二年に長毎は朝鮮に渡つたが、留守居役の犬童休矣に工事を繼續させて本丸だけ略完成した。やがて長毎は朝鮮から凱旋して、其他の工事を續けさせたが、慶長五年關ケ原戰の爲め東上することになつた。其の不在中に、普請役の内田甚五左衛門と龜山瀨兵衛とが、工事に關して意見の衝突を起し刄傷に及んだ、又此の喧嘩の仲間といふ事で、犬童源兵衛・勝又新兵衛は常樂寺山で切腹、又窪田德之助は永國寺山で切腹を命ぜられ、遂に工事は延期となつた。

第二十一代　頼寛

(ロ)外郭石垣の完成。 慶長十二年正月、長毎は改めて城の外郭石垣の大築造を始めた、その完成したのは長毎の死後頼寛の代の寛永十六年で、その間に工事に斷續はあつたらうが、前後三十三ケ年を費した。

此大工事の計畫者は時の家老相良清兵衛頼兄であつて、工事監督の惣奉行は米良三左衛門・菱刈平駄の二人が勤めた。用石は凡て藍田の岩川内から夜の内に車で二度づつ運ばせた。此運搬の大車を通す爲め、特に開いた道路を車路と呼んだ、今人吉町の南町がそれに當る。大俣・小俣の兩橋を大岩瀨にかけさせたのも此の時である。

規模

（三）規　模

古記に依つて本丸及外郭の大さを記さう。

本　丸。　東十五間、西十七間、南廿八間、北廿間、

二の丸。　東三十間、西卅三間、南廿二間、北十間、

三の丸。　東卅一間、西五十八間、南三十六間、北百四十間、

惣曲輪。　北・球磨川に沿ふ外郭石垣三百五十間、

西・胸川に沿ふ外郭石垣二百二十一間、
東側二百八十間、南側三百八十二間、
惣曲輪の周囲には、西に大手門、東に原の城門、南に岩下門、北に水手門の四つの城門が設けられた。

寛永以後は全体の規模の上には大した變化はなかつた、ただ城内の建物の位置や大さには、火事などの爲め時代により多少の變化があつた。

享和二年二月長寛の代に、城内から火を失して重な建物が焼けた。

虎助火事

文久二年二月頼基の代に、人吉町から大火事が起つた。世に虎助火事と傳へられて居るもので、今の人吉町上鍛冶屋町に住んだ鍛冶職虎助方から出火して、全町を焼きつくし、遠く川を越えて城内へ飛火し、城の内外殆灰燼に歸してしまつた。其の時強風に煽られた炎は、藍田の田畝に積み重ねた稲穂までも焼きつくしたと云はれる。廢藩當時の建物は、此大火後に再築されたものである。

維新と共に城門城壁その他の建物一切とりこぼたれたが、石垣のみは今も昔の偉観を止めて居る。

第十一話　相良清兵衛頼兄の末路

相良清兵衛頼兄こそは、相良七百年の歴史中に、其の奇才と豪膽とに於て又一藩の柱石としての功績に於て、比ひを見ない英傑である。

義陽の代に、水俣の城代を勤めた父頼安が薩軍に包囲されたと聞いて、稚児をして居た延命院を忍び出てただ一人水俣に馳せ參じ、父と共に籠城の苦を嘗めた十四歳の少年熊徳丸の時代から、元服して名を軍七と改め、父に従つて諸方に轉戰した壯年時代を經て、更に長毎の重臣として朝鮮征伐に従ひ、北韓の天地に武威を輝やかした相良兵部の時代、尋いでは關ケ原の戦に巧妙細心な暗中飛躍と奇才豪膽とを以て相良の封土を全うした清兵衛時代、さては父の功を繼いで繊月城外郭の築造に最後の御奉

公を捧げた三十三年の星霜、あれもこれも今は昔の夢となつて、清兵衛齢を重ぬる事茲に七十三となつた。

球磨二萬二千石の内八千石は彼の所領であつた。

一門繁榮

娘は主君頼寛の夫人となり、嗣子內藏助頼安は前主長每の弟分として島津家の娘を娶り、孫の喜平次頼章の妻は長每の娘即頼寛の妹であり、一門の榮華は人の目をそばだたしめた。

球磨川に沿うて城內に聳えた彼の邸宅は、御下と呼ばれ、藩主の御舘を凌ぐ豪奢を盡くし、藩廳へ出仕の往復の勞を減ずる爲め、御舘の石垣を切り開いて造らせた新道は、今も殘つて彼の威勢を傳へて居る。

清兵衛訴へらる

しかし、此時すでに呪の魔は、早くも彼の權門に忍び寄つて居た。彼と水魚の交ありと信じられて居た長每でさへ、嗣子頼寛へ贈つた遺言五ケ條の一項に、

清兵衛・內藏助・喜兵次三人の者共の儀は、兼て貴所と內談申置候通題目に候、時分を以分別專一に候事。

と書き殘した。

寛永十三年父の跡を嗣いだ頼寛は、十七年五月遂に九ケ條の罪狀を擧げて幕府に清兵衛父子の專橫を訴へ其處分を願ひ出た、罪として數へられた重な點は次の通りであつた。

一、清兵衛隱居所を岡本に築き、人吉城下の商人など移り住ませ、城下衰微するに至つたこと。

一、家中の知行を橫領し、又恣に家中侍の知行を沒收したこと。

一、長每及頼寛に對し忠實な者を妄りに却けたこと。

一、百姓から聚斂し地方を疲弊させたこと。

一、島原の亂の時清兵衛出兵を承知しなかつたこと。

一、領分の納方拂方を主君に知らせず、又清兵衛父子の知行高も主君に告げないこと。

一、喜平次にも穩かならぬ言動のあつたこと。

寛永十七年八月には更に重ねて十三ケ條の罪惡を列べた訴狀が差出された、それは前の訴狀に掲げられた條項に左の如き罪が加へられてあつた。

一、家中諸侍に自巳の金銀米穀を高利で貸附け取立をきびしくして疲弊させた事。

一、賴寛の弟長秀の知行の加増に同意しないこと。

一、侍及び寺社に役を命じ、且其屋敷内の竹木を横領したこと。

一、主君の邸宅の大破修繕を捨て置いて、自宅は身分不相應の豪奢を極めた事。

要するに此等の訴狀から察すると、清兵衛一家が長く一藩の政權を獨占し、おのづから專横の行も多く、藩主も勳功と實力とに對し制し兼ね、藩士からも嫉まれたり嫌はれたりするに至つたのであらう。

江戸へ召出

寛永十七年六月清兵衛は遂に江戸に召し出され、やがて稻葉美濃守の屋敷へ御預けとなつたが、八月二十七二十八の兩日に幕府で裁判が開かれる事になつた、當日大老酒井讃岐守忠勝を始め老中井伊掃部頭直孝・松平伊豆守信綱・阿部豊後守忠秋・阿部對馬守重次・堀田加賀守正盛等席に列し、賴寛は屛風の蔭で傍聽することになつた。

薄倖の老雄清兵衛は從容として裁きの座についた。思へば愛子内藏助賴安は、今年四月の末江戸の邸で吐血して病死し、其悲嘆も未だ去らぬ今日、七十三歲の老軀を提げて、大老老中とはいへ若輩の忠勝信綱等の裁きを受けねばならぬとは、如何ほど心外な事であつたらう。

彼は訴狀に對して一通りの辯明を試みた、其の言葉には古稀を過ぎた老人の繰言らしきものは露程も無かつた、まことに淡々として人生を達觀した傑士の高風を偲ばしむるものがあつた、智惠伊豆の智惠も、硬骨忠秋の眼力も遂に老雄を救ふに至らず、九月五日に判決が下つた。

津輕流謫

權現樣以來御目見仕來者故、命御助、津輕越中守殿へ被召預。

淸兵衞は此を聞いて眉の毛一つ動かさず、

御上意の旨奉畏候

とたゞ一言答へ、胸には彼の出立後に起つた痛ましい一家沒落の悲報を抱きながら、たゞ一人の愛孫喜平次にも會はず、飄然として江戸を去つた。此年から十四年、骨肉の住む南國と山河相隔つる六百里の雪深き奧州津輕城下に、主從七人は世を忍ぶ生活を續けたが、明暦元年七月十二日八十八歳を以て靜に世を去つた。

辭世

やがて彼の死と共に其辭世は弔ふ人も絕えた鄕國に傳へられた。

餘命有限五更雲　八十八年風前燈。

終にはと思ふ心のすゑとげて

月の都に今たち歸る。

月とともに影くらからぬ山路かな。

御下の亂

（附）御下の亂

淸兵衞が江戸へ出立後留守居をしたのは淸兵衞の義理の子田代半兵衞賴昌であつた。（賴昌は八代の蓑田家に生れ、實父の死後母が淸兵衞に再緣したので、一緒に引取られて養はれ、田代氏を名乘つた）。半兵衞は詳しい事情は分らないが密かに樣子を知つて、淸兵衞に對する主君の仕打に不平を抱き、反抗の態度が見えたので、寬永十七年七月七日藩から士卒を繰出して御下と呼ばれた淸兵衞の邸を圍み火を放つた。此日半兵衞を始めとして淸兵衞の一族郞黨男女數十人悉く討死した。翌八日燒跡の檢分の後、死骸全部を筏にのせて川筋を龜ケ淵に運ばせ、大きな穴を掘つて一緖に埋葬を終へた。

半兵衞殿石

今龜ケ淵の北、球磨川に沿ふた畠の中に半兵衞殿石と呼ばれて大きな石碑があるのが其墓標である。其の後、七月七日の夜には半兵衞等の亡靈が出て、馬蹄の響が屢里人の夢を驚かしたと傳へられて居る。

居る。

第十二話　球磨川の開鑿と幸野溝の貫通

球磨七百年の歷史の中で、土木工事の最大のものは、三十三ケ年を費した人吉城外郭の築造であらう。是に尋いでは、球磨川の開鑿と幸野溝の貫通とを擧げねばならぬ。

個人の苦心

けれども築城は藩侯の威力と財力とをもつて行はれ、戰時には防禦の役をするが平時には大名の威風を示す飾り物に過ぎない、しかも封建の制廢れた後は、ただ昔を偲ぶよすがとして殘るのみである。然るに後の二事業は、主として個人の苦心努力に依つて行はれ、且二百年後の今日、球磨十萬の民は之に依つて運輸交通の利を得、之に依つて灌漑耕耘の便を與へられ、遺澤遠く子孫に及んで居る。

纖月城の偉觀も固より鄕土の誇たるを失はないが、更に大なる誇として此二大事業を擧げたいと思ふ。

（一）　球磨川の開鑿

球磨川開鑿以前に、人吉から八代方面へ行くには、万江村照岳（てるがく）の嶮を越えて八代へ出たもので、藩主の江戶參勤の折なども此路に依つた。又別に球磨川の斷崖に沿ふた難路があつて、米その他の產物は此路によつて神瀨村多武除まで人夫にかつがせ、此所から漸く船で下した。

あの巨岩縱橫に突出した激流に船を通はせようとは、嘗て夢みた人も無かつたであらう。

三年の努力

此大事業を企て、獨力三年の星霜を費して工事を完成した人は、人吉の一市民林藤左衛門正盛である。

藤左衛門は、豫てから球磨川を開鑿して船を通したならば、主君の參勤の往復の便は言ふに及ばず、郡民一般の運輸交通の便を進める事頗る大

きいと考へて居たが、寛文二年藤左衛門四十一歳の時、厄落しの年を機として、遂に意を決し此難事業に當る事になつた。

寛文二年の春先づ川筋を調査して石工に相談した所が、岩石を割りのける事を請合つたので、大に喜んで時の藩主頼喬(よりたか)の許を願ひ、早速工事に取りかかつた。

第二十二代 頼喬

先づ神瀬村多武除を起点として、上流に向つて工を進めた。此邊りから一勝地までは、岩石も錯綜して流も激しく一番の難所であつた。殊に大瀬附近では龜石といふ巨岩にぶつかつた。石工達も此堅い岩ばかりはとても割れないと皆手を引いた。けれども此岩を取りのけなければ船を通はす事が出來ない。

さらばよし、此の石堅きか我が意志堅きかと藤左衛門は心に叫んで、龜石のほとりに佇み、日夜工夫をめぐらしたが、良い方法も思ひつかない。萬策つきて茫然として居る時、一疋の狐が山から飛び出して來た、その時藤左衛門は覺えず呼びかけた、

狐よ此瀬の石を割る方法はないものか、どうぞ汝の神通力を貸しては吳れまいか、

狐に向つてまでも助を求めた藤左衛門を思ふ時、其の苦心焦慮の程も推しはかる事が出來るであらう。

其夜藤左衛門の夢に、稻荷の神が現はれて御告げがあつた、

其石の上にて多くの火を焚けよ、石は忽割れるであらう、割れた石を取りすてて又火を焚け、かくて七日の間繰り返せば、巨岩も跡なく割りつくす事が出來るであらう。

藤左衛門はこをどりして喜び、直ぐさま薪數百把を岩の上で焚いた。不思議や石工の鑿をはねかへした程の堅い石も、響をたてて割れ始め、三日の內に跡も殘さず取りのける事が出來た。此事は藤左衛門自ら筆を採つて子孫に書き遺した記錄にも見えて居る、且後に邸內に稻荷の祉を建立

亀割

して恩を謝した事も傳へられて居る。今、龜割と呼んで居る所が其の遺跡である。

此樣な苦心を繰返しながらも、工を始めてから三年目の寛文四年、遂に人吉城下まで開鑿を終へた。やがて八代に注文して造らせた川船も出來上つた。かくて木の香新しい通船が始めて此水に浮べられたのは、寛文五年藤左衛門四十四歳の春であつた。

產物の輸出が盛んになり、其の價格も今までの五倍に騰り、產業は日に日に發展した。

藩主は藤左衛門の功に報ゆる爲め、林家に郡中の荷物問屋 川船取締役及船問屋たるの特權を與へた。

寛文八年賴喬（よりたか）江戶參勤の際、始めて靑井から川船で八代に下り、つぶさに藤左衛門苦心の跡を視た。翌九年賴喬江戶から歸國すると程なく、藤左衛門の私宅を訪ふて數々の贈物をなし重ねて其功を賞した。藩主が一商人の私宅に駕を枉げる事は、當時にあつては未曾有の光榮であつた。かくて林家は郡民の尊敬と感謝を受け、一門は繁榮し富は累ねられた。

元祿十年十一月十二日年七十七の時藤左衛門は世を辭した。

歿後二百二十七年、世は漸く此偉人の名を忘れようとする 大正十三年に、朝廷其功を思し召されて從五位を贈らせられた。

（二）　幸野溝の貫通

幸野溝は球磨川の水を引いて、湯前・久米・多良木・岡原・上村等の 村落の水田灌漑の爲めに拓いた一大水路で、水上村幸野附近から水をとり入れ、岡原村永山に至るまで、延長四里十八町に亘り、此によつて灌漑される水田は二千町步の廣きに及ぶと云はれる。

此の水路の開拓者は、相良家に仕へて小祿を領した 高橋七郎兵衛政重である。

林藤左衛門が球磨川開鑿の工を終へた寛文五年には、政重はまだ十六歳の少年に過ぎなかつた。けれどもかの巨岩が切り開かれて、激流を走る白帆の影を眺めた時、又民福の偉人の住家へ、藩主自ら御成の光榮を仰いだ時、感激に充ちた少年政重の心に閃く何物かが無かつたであらうか。其閃きと彼が後年の偉業との間に、誰か一脈の縁なしと云ひうる者があらう。

或年政重は藩主頼喬の命を奉じて領内各地を巡察した時、ふと湯前・久米あたりの荒野に、肥沃な土地があつて、もし水利をよくしたならば數百町歩の美田を拓かれるといふ事を聞いて、直ぐさま調査に行き其事實を確めた。

政重の計畫は、時の家老万江長矩の賛成を得て、元祿十年頼喬から水路開鑿の命が下つた。

十六歳の少年の受けた靈感は、卅二年後の今日、四十八歳の政重の胸によみがへつた。其血は此厚生の偉業の上に湧き立つた。

此年宛も球磨川開鑿の偉人は、七十七歳の老軀を病床に横たへ、程なく世を去つたが、此新しい計畫を耳にした時、恐らくば我れに後ありとほほ笑んだであらう。

工事は創められた、球磨川の水流は塞がれて其所には大きな堰が築かれた。政重の熱心と、美田を得る希望とに勵まされた村人は、勇んで工事に從つた。凡そ一年の後、四里の新しい水路は荒野を貫いて長蛇の如くに走つた。然るに何故か豫想したほどに水が流れない、美田を夢みて居た里人は、欺かれたといつて怒つた。藩士達は愚擧と呼んで冷笑を送つた。名君頼喬は流石に政重の勞苦を察し、信頼と同情との沈默を守つた。

罵詈と嘲笑との雨に濡れながら、政重は默々として四里の水路を調査し始めた。水路の勾配に誤は無かつたであらうか、荒地の粗鬆な土質に水が吸込まれてしまふのではなからうか。高い所は削られ、漏れる所は埋め

られた。かくて人知れぬ苦心の三年は過ぎた。今度こそはと政重は快心の笑をもらしたがあはれにも其年卽元祿十四年の夏は稀なる豪雨が降りつづいて、渦まく激流は幸野の堰を押し流してしまひ、一滴の水も新水路には流れなくなつた。

今や凡ての人が絶望し斷念して、もはや嗤笑の聲さへ聞く事が出來なくなつた。しかし政重だけは倘其志を捨てなかつた。しかも政重に取つて更に大きな不幸は、彼を信任した賴喬が元祿十六年に歿した一事である。

第二十三代
賴福

賴喬の跡は實子が皆夭折したので、從弟の賴福（よりとみ）が嗣いで第二十三代の藩主となつた。

賴福は從來の失敗に懲りて、政重の熱心な復興の希望も容易に許して呉れなかつた。

そこで政重は愈獨力此事業を再興する決心を固め、先づ資金を作る爲め關係の村落をへめぐり、戸毎に其利を說いた。彼が厚生の眞心は遂に人々を動かさずにはおかなかつた。やがて百兩の資金が集つた。時の家老米良陳章も彼の熱心に動かされ、江戸參勤中の賴福に言上したので、寶永二年の春工事復興の許可が江戸から傳へられ、改めて政重及二人の藩士に其掛を命ぜられた。けれども二士は程なく病と稱して難事業に當る事を辭したので、政重はひそかに神明の加護を祈りながら獨力工事を創めた。此の時薩摩から暗渠を掘るに巧な者を四五人求め得たのが此上もない力となつた。時に寶永二年三月十六日、第一回の工事が大雨に流されてから四年目である。

やがて球磨川の右岸から流を横切つて二十間の横堰が築かれ、更に西に折れて流に沿うて四十間の堅堰が成つた。丘陵には水を通ずべき三つの略平行した大トンネルが穿たれた。其長さは、北のトンネル三百四十三間、中央のトンネル七百六十九間、南のトンネル三百七十四間、總てで千四百八十六間になる。最大の中央トンネルには處々に明り窓を設け、滿水

でなければ舟遊も出來る大さであつた。四里の水路には六ケ所の閘門が設けられ、五十ケ所の橋梁が架けられた。かくて上球磨一帶の荒野に、流水の淙々たる聲を聞くに至つたのは、此年の十二月であつた。最初の工を起した元祿十年から八年目にして政重が厚生利用の大望は達せられた。

前後八年

　數年の後荒蕪の地は黄金の波をたゞよはす稻田となり、一年の納米三千石に上つた。藩主は其祿を加增して功を賞した。

　大正十三年には林正盛と共に朝廷から從五位を贈られた。

第十三話　習教館と鄕義館

(一)　習　教　館

　武家時代となつて戰亂が引續いてからは學問も衰へ、わづかに五山の僧徒に依つて其命脈を繫がれたに過ぎなかつた。

　相良氏は、鎌倉時代以來七百年の久しい間連綿として續いて來たが、亂世の影響を受け、文教に關する施設として見るべきものは殆無かつた。殊に小藩として大藩群雄の間に立つて、其獨立を維持するには、天嶮の利と士人尙武の氣とに賴るより外ない時代に、學問などを顧る暇の無かつたのは、獨り人吉藩のみではなかつた。

　しかし戰亂の世にも尙好學の主君はあつた。

爲續の連歌

　室町時代の中頃に出た第十二代爲續は、連歌の宗匠として古今無比と云はれた宗祇法師の門人となつて、宗祇をして

　御句二色拜見申候皆以珍重候度々給候より此句は事外面白存候誠以御數奇之程顯候間於身大慶候

といふ激賞の書狀を送らせた程の名人であつた。又宗祇が勅を奉じて撰した新撰菟玖波集には、爲續の連歌五首入選の榮を得た。

　京都の歌人一條顯鄕は、阿蘇登山の歸途態々爲續を訪うて歌を語つた。

長毎の好學

　第十三代長毎も聰敏好學の君であつて、相良家法度の始といはれる法

度式目四十一ケ條を制定した。

天文の初に書かれた洞然狀の著者は記して曰う

御連歌の事是又代々被信候

犬童休矣の矢文

元龜九年水俣籠城戰の時、守將犬童休矣が敵將新納武藏守と、矢文で連歌をとりかはした事も興ある物語である。相良武士が武事と共に文事にも心を用ひたのを知る事が出來る。

頼兄の學堂

更に降つて寛永の初、重臣相良清兵衛頼兄が其邸内に學堂を建てて、京都から鈴木壽庵といふ易學者を招き、易經を講義させ　尙三略吳子孫子など兵書の講義をも行はせ、聽講者三十餘人も集まり、壽庵は此所で講學三年に及んだといふ事である。頼兄の子頼安は此學堂を改造して易堂と名づけた。古記に其結構を記して曰う

寶形造りの瓦葺なり、柱は皆樫を以て唐木を學び、天井には孔雀鳳凰を書き、四方の壁には仙人の繪あり、尤左右の窓唐戸の脇には鳩口を明け銅の納戸を立て、正面に易の本尊を掛け、右には歌書百家の書籍を置き、左には易經を初め軍書儒書を飾り、見る人さながら經堂と謂ふべし、但寛永九年の草創なり、惣て折節には内藏助喜平次御家中を集め連歌興行被致しも右易堂にての事なり。

此學堂などは圖書館や學校に類したものであつたらう。其の後德川幕府の學問奬勵の結果として、全國の文敎は再勃興し、學者の輩出學校の設立など、眞に日本に於ける學藝復興の盛觀を呈した。

藩學

幕府の學校としては、元祿三年に湯島の聖堂が出來た、引きつづいて甲府に徽典館、駿府に明新館、日光學問所なども設けられた。

諸藩では水戶の弘道館、金澤の明倫堂、岡山の閑谷學校、米澤の興讓館、仙臺の養賢堂、名古屋の明倫堂、和歌山の學習館等があつた。特に肥後では熊本に時習館（寶曆二年）があり、宇土に溫和館（寶曆中）があり、八代に傳習堂（寶曆七年）があり、佐敷に啓徵堂（寛政二年）があつた。

人吉の藩學習教館の起つたのも、かやうな時勢の力に促されたもので、其創立は熊本の時習館に後れる事三十四年、佐敷の啓徴堂に先立つ事四年で、天明六年に當り、創立者は第三十一代の藩主好學の名君長寛(ながひろ)であつた、又長寛の命を奉じて創立の經營に當つた者は、學德一藩に秀でた儒者東白髮であつた。白髮は尾張藩の大儒細井平州の高弟で、專ら平州の指導を受けて藩學創始の經營を進める事になつた。

第三十一代 長寛

東 白髮

長寛は岡山藩主池田宗政の第二子で、明和六年十九歳の時、第三十代福將の死後の相良家を嗣いで文化十年六十三歳で死ぬまで人吉藩の文教を興し民に仁政を施した名君である。長寛の高祖父は有名な新太郎少將光政であつて、大儒熊澤蕃山を用ひて藩學を起し、産業を奬勵し、治績を擧げ、令名天下に聞えた人である。その血を傳へる長寛が、文政に心を用ひたのも偶然ではない。

東白髮は通稱を九郎次と呼び、寛延元年十二月六日藩士別府武德の次男として生れ、後東武紀の養子となつた。年十六の時江戸に遊學し、翌年更に京都に移つて四年間を研學にすごした。時の藩主福將は、美濃苗木城主遠山家から入つて相良家を嗣いだ人で、夙に生國に近い尾張の細井平州の學德を慕つて之に師事して居た。そこで福將は白髮を江戸に呼び寄せて、平州の門に學ばせる事になつた。白髮學ぶ事十一ヶ年、業就つて歸國した。福將は白髮の業卒るを待たず明和六年二十歳の有爲の身を以て世を去つた。それ故白髮の歸國した時は長寛の代であつた。長寛も學政を興す志を持ち、生徒を選んで白髮の家塾に學ばせた。

天明六年習教館が創立されたので、白髮は其教授(舘長を教授と稱した)となつて、遙かに平州の指導を受けて學制を定めた。

白髮は福將・長寛の後頼德・頼之を合せて四君に歷事し、厚い信任を受け一藩の學政を掌ると共に常に藩政の樞機に參與し、又世子の傅として其輔導に力を盡した。七十六歳の時漸く辭職を許されて隱居し、文政十二

年十二月十日八十二歳で歿した。

白髪の後に相繼いで教授となつた人々は、築地壯七・高畠總右衛門・赤坂堅次・高畠盡齊であつた。是等の人々は平州について久留米の樺島公禮に入門し、次ぎには江戸の佐藤一齊の門に學んだ。

當時の學風は、教授を通して平州・一齊の流をくんだものと見る事が出來る。

平州は折衷學派の巨擘で、陽明學派・古學派・朱子學派の何れにも偏せず、寧ろ諸派を參酌包容して孔孟の眞意を發揮しようとした、且又米澤侯上杉鷹山の聘に應じて、行政教化殖産興業の事に參畫した實際家でもあつた。一齊は聖堂の儒者として、陽に朱子學を奉じたが陰に陽明學に心を寄せ、陽朱陰王の評を受けた程で、自ら簡明直截を喜び、實踐窮行を尙ぶの氣分を包藏した人であつた。

此等の指導者の思想が藩士に及ぼした影響は、或は産業の上に或は一般士風の上に少なからぬものがあつたであらう。

組織の大要

習敎館の組織は大要左の如くであつた。

(イ) 職員

教授一名　授業及事務を總理す。
都講二名　教授を輔けて授業及事務を處理す。
典籍三名　書籍の保管を掌り兼て授業及事務を分擔す。
主宰二名　會計を掌る。
手代二名　炊事を掌る。
學僕三名　典籍以上の給仕をなす。
人足五六名　手代に附屬し雜役に從ふ。

(ロ) 生徒

書生頭一名。寄宿生十名。日通生十五名。(以上公費)
自方寄宿生。自方日通生。(以上自費、定員なし)

右の外、六歲以上の幼少な外來生が居て、習書生（讀書習字を學ぶ者）と讀書生（讀書のみを學ぶ者）との二種に別けた（定員はない）共に長じて寄宿生日通生となつて後、典籍以上の講義を聽く事を許された。

（ハ）日課

朝日課。午前六時都講典籍の內から一名當直の人が會頭となつて左傳史記等を輪讀する。

朝食。午前七時一同食堂に集合。

午前授業。午前八時から都講以下生徒全部講堂に出て各自受持の生徒に授業をなし午前十時に終る、午前十時から典籍一名習書堂に臨んで習書生に習字を教へる。

晝食。正午一同食堂に集合。

午後授業。午后一時から生徒一同講堂に列席し、典籍以上の人が一名會頭となつて聽講、輪講又は禮會を開く。

晚食。午后五時。

自修。午后六時から十時まで。

就寢。午后十時を門限とし生徒一同當直員（典籍以上より一名當直す）に敬禮して就寢する。

朝食前又は午後四時から劍術・槍術・砲術・馬術・柔術・練兵等各種の武藝練習の爲め許可を得て欠席をする者もあつた。

（ニ）敎科書

讀書生及習書生の素讀用としては大學・中庸・論語・孟子・易經・書經・春秋・禮記・左傳・史記・小學・近思錄・唐詩選・敎札（之は本館にて特に編纂したもの）。

一般生徒の輪講用としては小學・日本外史・十八史略・孟子等。聽講用としては大學・中庸・詩經・書經等。自修用としては國史略・日本政記・靖献遺言・孝經・左傳・史記・文章軌範・唐宋八大家文等。

學館の書庫には廣く和漢古今の書を集め、且必要な書は同種のものを多數備へて生徒の希望に從つて貸與した。

(ホ) 學館の行事

毎月一回藩主自ら臨んで聽講した。

年一回藩主自ら生徒に試驗を行つた、之を御試みと稱した。

新年、中秋、冬至、其他佳辰等に藩主又は教授の主催で詩會を開いた

毎年一回夏季に館員全部川漁に出かけ、水邊芝原などで獲物を料理して宴を張る事もあつた。

平州白髮兩先生の忌日には休業して祭典を行つた。

毎年七月は講堂の諸會を中止して書籍の蟲乾を行つた。

位置の變更

習教館の位置は火災の爲め三度變更した。

天明六年長寛創立の時は城內麓に建てられ、且八年には演武場も同所に建ち鄉義館と稱し、大に文武を獎勵された。

享和二年二月城內失火の爲め文武兩館とも延燒したので、文化二年賴德の時に兩館を人吉城下南小路(今の南町)に移して改築した。

文化十四年二月新小路南小路の大火の際兩館とも再び燒失したが、同所に再築された。

文久二年二月賴基の時の有名な大火、虎助火事に城內城外殆全燒して、兩館は三度燒失の災に會つた。

慶應元年に習教館を城內上の原に移築し、鄉義館を城內池の上に移築した。明治四年閉鎖まで引續いて此所にあつた。

(二) 鄉義館

古來武道の稽古は盛に行はれた事であらうが藩の施設として武館の設けられたのは、習教館創立の二年後天明八年で、創立者は長寛、場所は城內、名を鄉義館と附けられた。その變遷は既に前に述べた。

其組織を見るに、舘長は特に置かれなかつた、其れは本舘が各種の武術（劍・槍・砲・弓・馬等）を各別に練習する所であつたからである。

元來武藝に秀でた藩士は、各私邸に道場を開いて毎日門人を集めて稽古を行つて居た。其れ故鄕義舘では各種の武術について各別に日を定めて集會して居た。又稽古日には藩主も親しく臨んで練習を行ひ、藩士を奬勵して居た。生徒は概ね士族の子弟で、十二三歳以上の男子で各種の武術に就て隨意入門するから、各自の時間に希望する道場に出て、隨意に練習を行つた。　但武術は大概文舘の授業時間と諸役の勤務時間とを避けて、多くは朝食前若くは夕方七時頃から晩飯まで、又は夜十時頃までに行はれた。

師範者は各種武道に其れ其れ定められてあつた。維新前の重な武術家には、擊劍の那須拙速・犬童治成・相良九命、槍術の田代忠左衛門、砲術の澁谷三郎左衛門等が居た。

第十四話　丑歳騷動

幕初の名藩主池田光政の血を承け、迎へられて相良家に入り、第三十一代の主となつた長寛の卓れた經綸によつて、士風は擧がり民は仁政を樂しんだ。其餘澤は、賴德・賴之・長福の三代四十年間に及び、わづかに天保の茸山一揆の小波瀾を名殘りとして、淡々たる事夢の如くに過ぎて行つた。

第三十二代　賴德
第三十三代　賴之
第三十四代　長福
第三十五代　賴基

然るに第三十五代賴基の時に至つて、平和な谷の生活を破る血腥い悲劇が起つた。之を丑歳騷動又は家中崩しと呼んで居る。けれども廣く眺めると、是も此の谷に特異な現象ではなくて、我が島國に澎湃として打ち寄せた激浪の一飛沫に過ぎないのである。

文化文政の安逸の眠は天保の改革を以てしてもなほ醒ますに由なく、やがて現はれた嘉永の黑船に愕かされ、今更の樣に騷ぎ立ち、開國と鎖國

進取と保守、新規と舊慣は醜い狼狽に彩られながら、此所にも彼所にも爭の渦を捲いた。

新舊の爭

時勢の激流はやがて我が球磨の谷にも押し寄せて、和流西洋流の砲術家の爭となつて現はれた。

荻野流砲術

從來相良藩には荻野流砲術が用ひられて居た。荻野流は正保年間（家光時代）に荻野六兵衛安重が當時行はれた砲術の諸流を集成して創めた一派であつて、安重は寛文の頃池田光政に仕へて居た。此流が相良藩に傳へられたのは恐らくば長寛の鄕義館創立時代ではなかつたらうか。

西洋流砲術

西洋流砲術は高島秋帆が文政年間（家齊時代）に長崎に於て蘭人から傳習したもので、後に高島流と改めたが天保年間に長崎に開いた秋帆の塾には、三百餘名の門人が集まつて居たといふ事である。相良藩に西洋流の傳へられたのは多分此頃からであらう。其の最盛に流行し出したのは第三十四代長福の時江戸又は長崎に於て西洋流を練習して歸藩した藩士松本了一郎・中村友輔・米良小源次・米良造酒等の熱心な宣傳の力に依つてである。是等の新式武術家達は從來の和流は全く無益で西洋流を練磨すれば槍も劍も不要とまで傲語した。

荻野流の砲術師範等は自流に對する輕侮に激昂した。其他の武道師範及び傳統保守の人々も彼等の傍若無人の傲語に反感を持つた。

かくて新舊思想の反目は漸く烈しくなつて來た。

藩主長福は、青年藩士達に西洋流砲術の研究を許した程の聰明進取の君であつたが、安政二年の夏三十二歳の壯年を以て世を去つてしまつた。長福の子實竹之進（賴紹）は年僅に三歳であつたので、弟の賴基が嗣いで第三十五代の藩主となつた、しかもその賴基とてもまだ十五歳の少年に過ぎなかつたのである。

時の家老那須四方介は荻野流砲術及劍術の師範家で藩主の指南役をも勤め且信任篤き人であつたので、西洋流砲術家に取つては最も邪魔者に

見られて居た。何か失脚させる折もがなと待ちかまへて居た所へ、丁度或る勤務上の落度のあつたのを拾ひ上げ、松本了一郎・中村友輔・米良小源次等は盛に四方介を攻撃した。頼基も捨て置き難く遂に慶應元年八月四方介を退職させる事になつた。

強敵は除かれた。其の上文久三年の下關外艦砲擊や鹿兒島英艦入寇の時の西洋大砲の威力を稱へ和流砲術の無力を說いて益藩内に勢力を伸ばした。

家老澁谷三郎左衛門も荻野流の師範家であつたが、自流の影のうすれ行くのを悟つて、其の稽古場を西洋流の人々に讓り渡すに至つた。

殿中でも兩派が對立して事々に反目し激論を交す事も度々であつた。

たまたま守舊派の人々は、了一郎等急進派一味の者共が思ふ存分自流を發展させる必要上から、穩健な頼基を幽閉又は毒殺して養子竹之進の十三歳となつたのを立てようとの陰謀を企てて居ると密かに頼基に囁やいた。かくて君命の名の下に反對派首領連の暗殺が企てられた。

慶應元年九月二十五日の夜半、白鉢巻に鎖帷子(くさりかたびら)を着込み、手に手に槍劍を提げた二十數名の藩士は、城内春日社の森に集つて其々手配を定め、足輕若干を召連れて城の裏門から忍び出た。

此の夜痛ましい時勢の犧牲となり雄圖空しく青苔の下に埋め終つた人々は左の通りであつた。

松本了一郎、　中村友輔及其子文輔、
豊永泰三郎、　東津之介及其子亭一郎、
山田賢助、　新宮半七郎及其子熊作、
高畠精一、　日野佐一及其子貫藏、

黨中の豪俊松本了一郎の屍は、寸寸に斬り刻まれ見るもむごたらしい姿であつた。了一郎此の時四十四歳、まさに男の働き盛りであつた。

最も哀れを止めたのは日野一家である、上意上意と呼ばはりながら家

内へ踏み込んだ時、暗闇の混雑にまぎれ同室に打ち臥して居た貫藏の妻と三歳の幼女までも斬り殺した、殊に妻は二十一歳で姙娠の身であつた。一說には妻女を殺す氣は無かつたが、討手が立去らうとする時何某殿と夫の仇の名を呼んだので、呼ばれた人は後難を恐れて引返し抱いた子諸共討果したとも傳へられて居る。哀れな父子妻女四人の墓は、今も永國寺内の山かげに相並んで當時の慘劇を偲ばせて居る。

中村友輔の子文輔は當夜泊り番で藩廳に出仕中を詰所で殺された。

以上の外尙二人の自殺者があつた　即井口卯六郎と田代甚兵衛とである。

井口卯六郎は城內に住んで居た、刺客の押入つたのを知るや早くも脫出して御舘の門を叩き、火急の事主君のお耳に入れたいから明けて吳れと賴んだが、門衛が許さない、止を得ず塀を乘越へて飛込むと、すぐ捕へられ連りに嘆願した主君への拜謁も許されず、廿六日の晝遂に死を賜はつた。

田代甚兵衛は作事奉行で作事場に宿直中、隣家なる自宅から狼藉者推參と告げられると直ぐに町に住む家來方へ逃れ、私憤より起つた事か上意によるか事情の探査を依賴して、西村神宮寺へ走つた、やがて上意との報を得ると共にそこで自殺して果てた。

此の外偶然の事から命を全うした人もあつた。即米良小源次・米良造酒の二人は此の事件以前に鐵砲買入の藩命を受け長崎に行つたが首魁といふので二十六日刺客を差向けられた、刺客等は一應主命の趣を長崎奉行に屆け出た、兩士はそれを洩れ聞いて薩藩士本田彌右衛門に保護を賴み薩藩の汽船で鹿兒島へ逃れ指宿溫泉に潛む事になつた。

薩藩の忠告

當時の薩藩は一世の英主齊彬の指導により、夙に西洋文明を輸入してゐた、齊彬の死後忠義嗣ぎ久光後見となつたが前代の遺風をうけて國を治めて居た、從つて急進派を代表する兩米良の亡命も頗る同情を以て迎

へられた。

十月に島津家から藩士中村新兵衛が使者として人吉に遣はされ、事件の見舞旁實情を調査して歸國した。

十一月には相良家から藩士片岡一二を使者として鹿兒島に赴かせ、見舞の禮と共に兩米良引渡しを依賴した。

十二月四日島津家から使者本田彌右衛門、中村新兵衛が再び人吉に來り、親しく藩主賴基に謁し忠義及久光の意を傳へた、卽國家多事の際有爲の士を失ふ事の不利を說き米良兩士の心事の公明を述べて兩士の命乞をした。

相良家でも餘儀なく同意の旨を答へて使者は歸國した。かくて翌慶應二年一月漸く米良兩士は歸藩して不幸な亡友の靈を吊ふ事が出來た。

偖此の悲劇の原因として唱へられる松本一派の藩主廢立問題に就ては確實な證跡を認める事が出來ない、島津家の使者から

罪狀の糸口如何樣の所より致發覺候哉

と尋ねられた時、相良家の答は

右は松本了一郞致發言候顯然たる證據有之云々

とあつただけで歷然とした具体的の證據としては何も示すべき材料が無かつた。

其れ故果して急進派によつて廢立の陰謀が企てられたのか、或は保守派が反對黨を仆す口實として藩主に言上し、上意の美名の下に此の慘劇を敢てしたのか知るによしないが、若し眞に廢立の陰謀を企てた事が明白であつたなら、あの樣な方法に依らずともつと公明正大な法の裁きを以て罪を定める事が出來なかつたであらうか。

さりながら當時の我が國情を眺めると、尊王と佐幕、攘夷と開港とが入り亂れて世論囂々の際で、相良藩に於ける西洋流砲術家達は開國論者とも見られ、從つて佐幕黨の匂ありとも考へられる、之に對して荻野流砲術

家連は攘夷論者とも見られ、從つて尊王黨の色を帶ぶとも思はれる、かやうな問題がそれほど赤裸々に論議されるに至らなかつたにしろ、暗々の内に此の對立の機運は動いては居なかつたであらうか。

保守派の牛耳を握つた神宮簡が文久以來京都に往來し又長州に落人となつた三條等七卿と好を修めて居た事や、田代忠助が京都に在つて薩藩と行動を共にし王事に奔走した如き事實は、此の間の消息を語るものではあるまいか。

かくの如き國家多事の際藩論を一定し向ふ所を定め將來の紛擾破綻を防ぐ爲めに藩内に優勢な位置を占めて居た保守派の人々の默認の下に此の擧が行はれたのでもあらうか。

時の流れが事實の眞相を示すまで多くの疑を存しつつ玆に筆を擱く事にしよう。

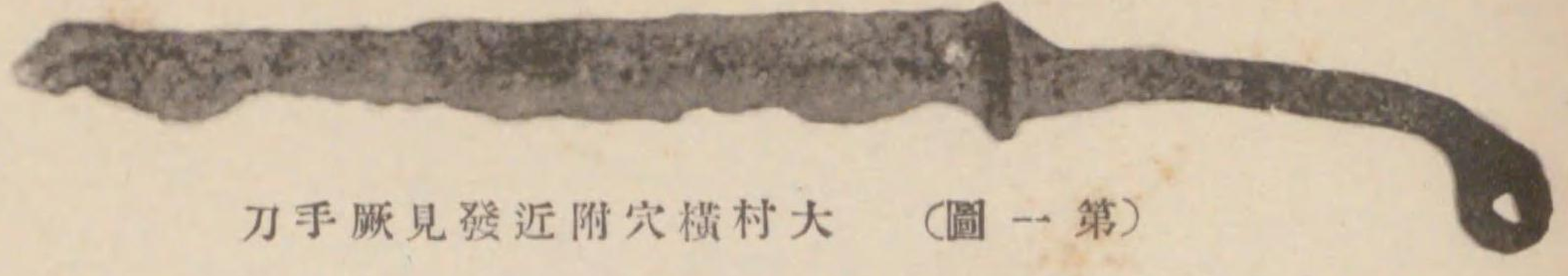
かくの如き國家多事の際藩論を一定し向ふ所を定め將來の紛擾破綻を防ぐ爲めに藩内に優勢な位置を占めて居た保守派の人々の默認の下に此の擧が行はれたのでもあらうか。

　時の流れが事實の眞相を示すまで多くの疑を存しつつ茲に筆を擱く事にしよう。

相良氏系圖

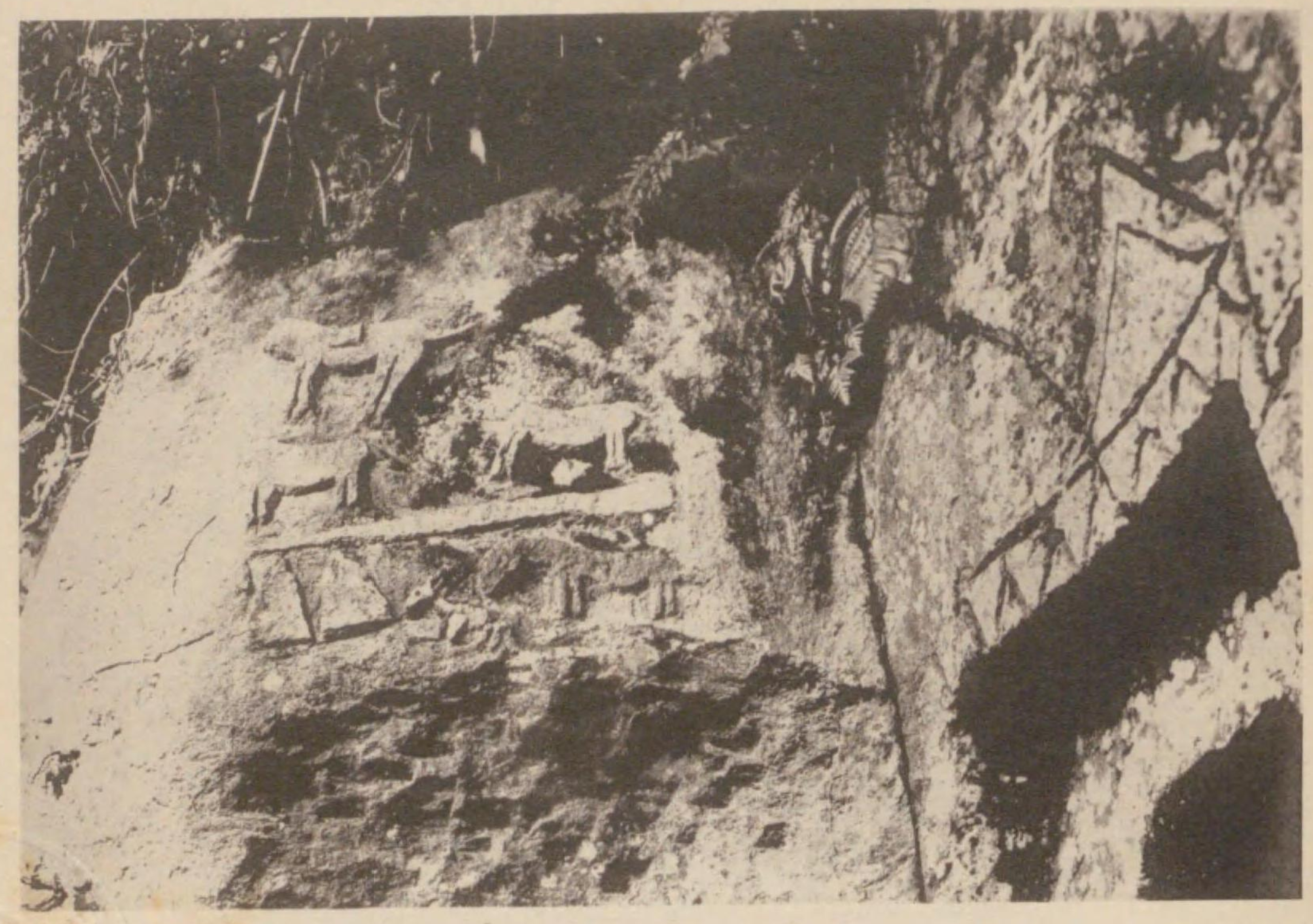
藤原鎌足—不比等—武智麿—乙麿……時理

- 時信（伊東氏祖）
- 維兼（相良氏祖）—維頼—周頼……頼景
- (一)長頼—(二)頼親—(三)頼俊—(四)長氏—(五)頼廣
  - 頼俊
  - 頼村……晴廣
  - 頼明……長續
  - 朝氏
  - 祐長
- (六)定頼—(七)前頼—(八)實長—(九)前續—(一〇)堯頼
  - 頼書
  - 頼成
  - 前成
- (一一)長續
  - 頼金—長定
  - (一二)爲續—(一三)長毎—(一四)長祇—(一五)長定
    - 義滋
    - 瑞堅
- (一六)義滋—(一七)晴廣—(一八)義陽—(一九)忠房—(二〇)長毎
  - 頼貞
  - 長毎
  - 長誠
- (二一)頼寛—(二二)頼喬—(二三)頼福—(二四)長興—(二五)長在
  - 長秀—頼福
  - 長在
- (二六)頼峰—(二七)頼央—(二八)晃長（秋月氏出）—(二九)頼完（鷲尾氏出）
  - 頼央
- (三〇)福將（遠山氏出）—(三一)長寛（池田氏出）—(三二)頼徳—(三三)頼之
- (三四)長福—(三五)頼基—(三六)頼紹—(三七)頼綱（子爵）
  - 頼基—頼紹
  - 頼綱
  - 基孝

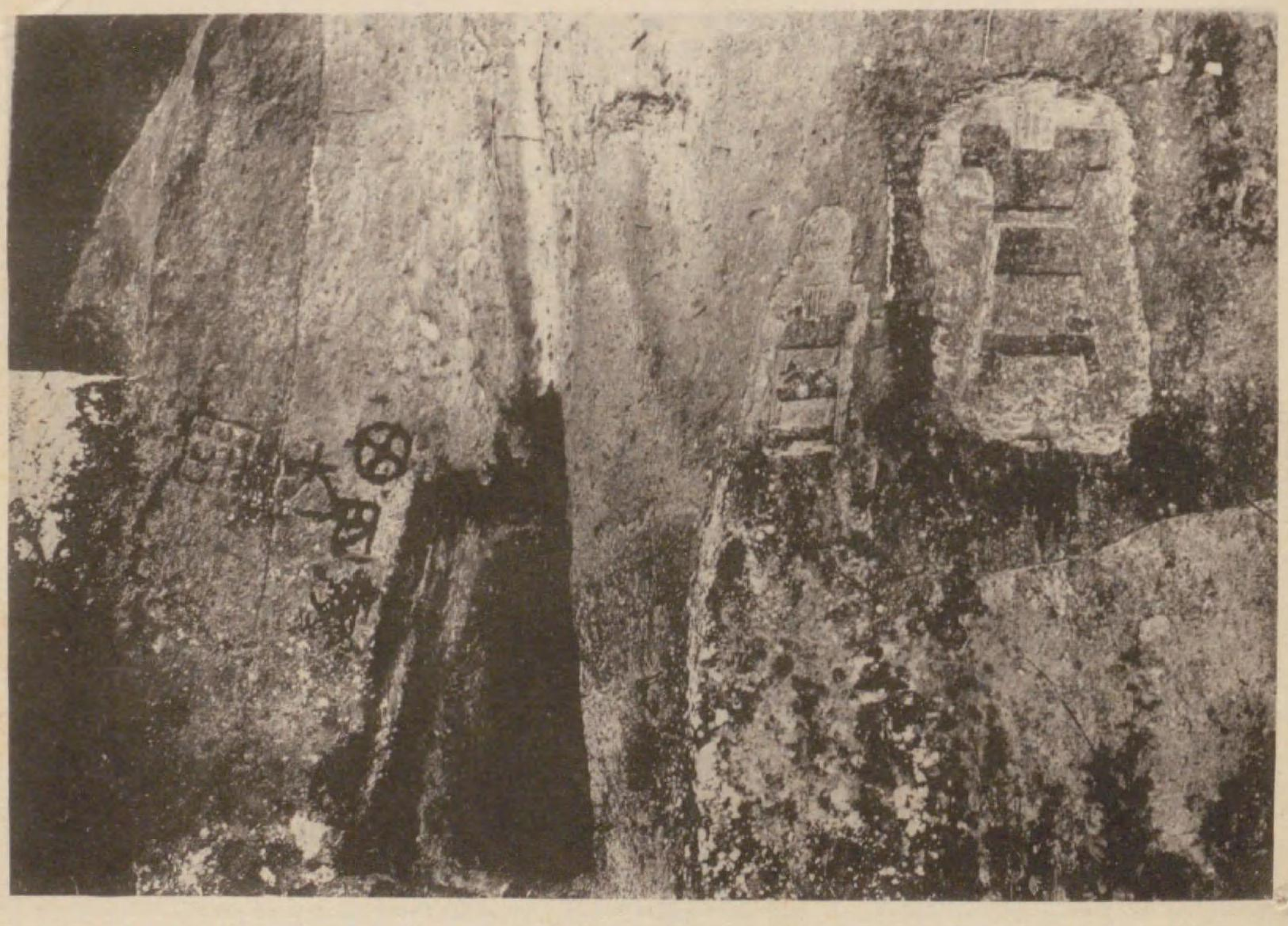


（第一圖）大村横穴附近發見厥手刀

（第二圖）大村横穴第十一號入口



（第三圖）大村横穴第七號側壁彫刻



（第四圖）西村横穴第一號入口

（第五圖）矢瀨主馬佑墓

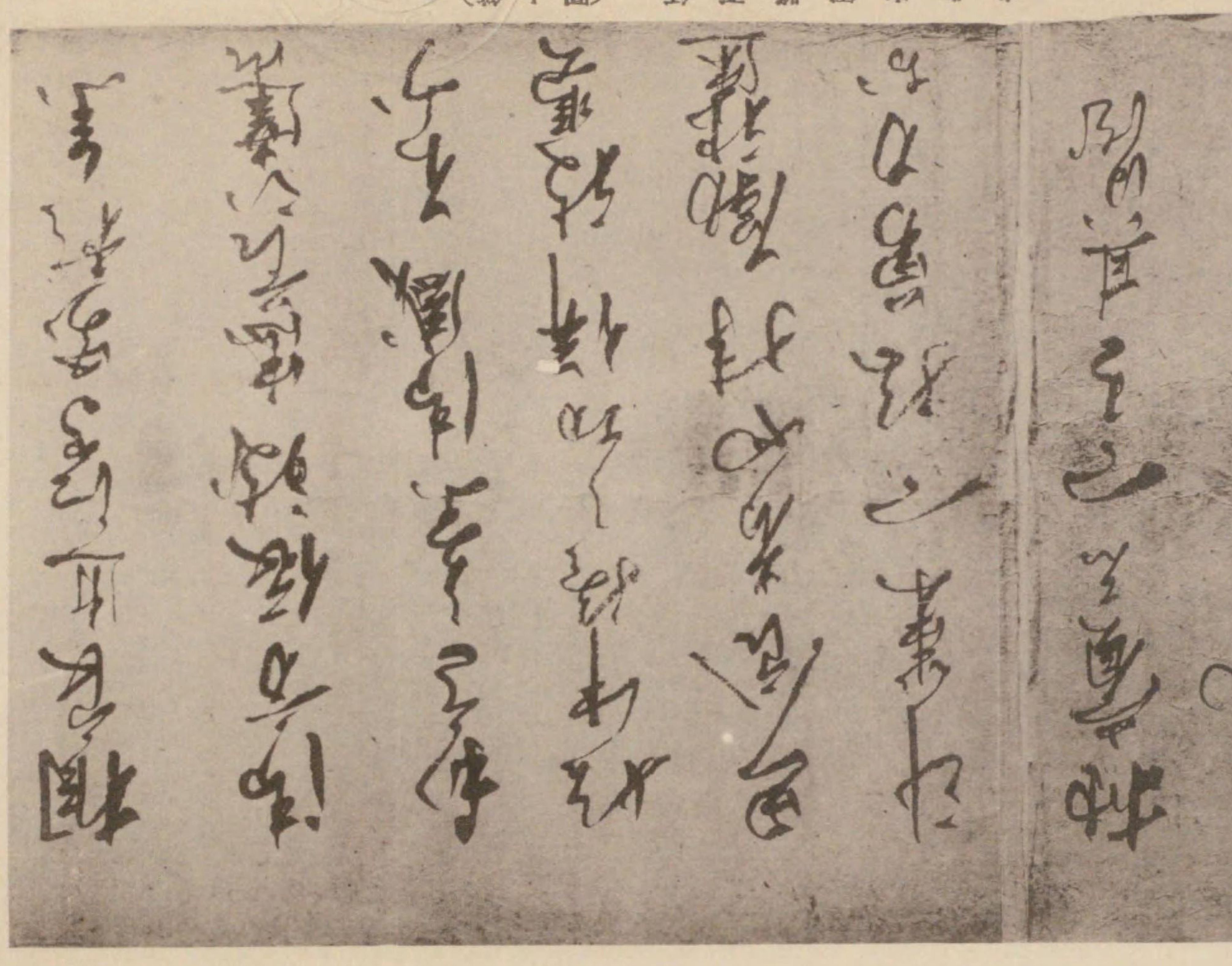
（第六圖）矢瀨津留附近之胸川

第七圖　征西將軍宮御書

原寸　縱一尺一寸一分　横三尺一寸五分

相良近江守前頼參
御方、依致忠節、被達御
本意之條、御感不少、
始中終之功、併被濃
思食者也、殊勵神速
計策、可施勇力、於
抽賞者、可有其沙汰
者也、
元中二年二月十七日

（後征西將軍宮良成親王前頼の忠功を嘉奬し給ふ）



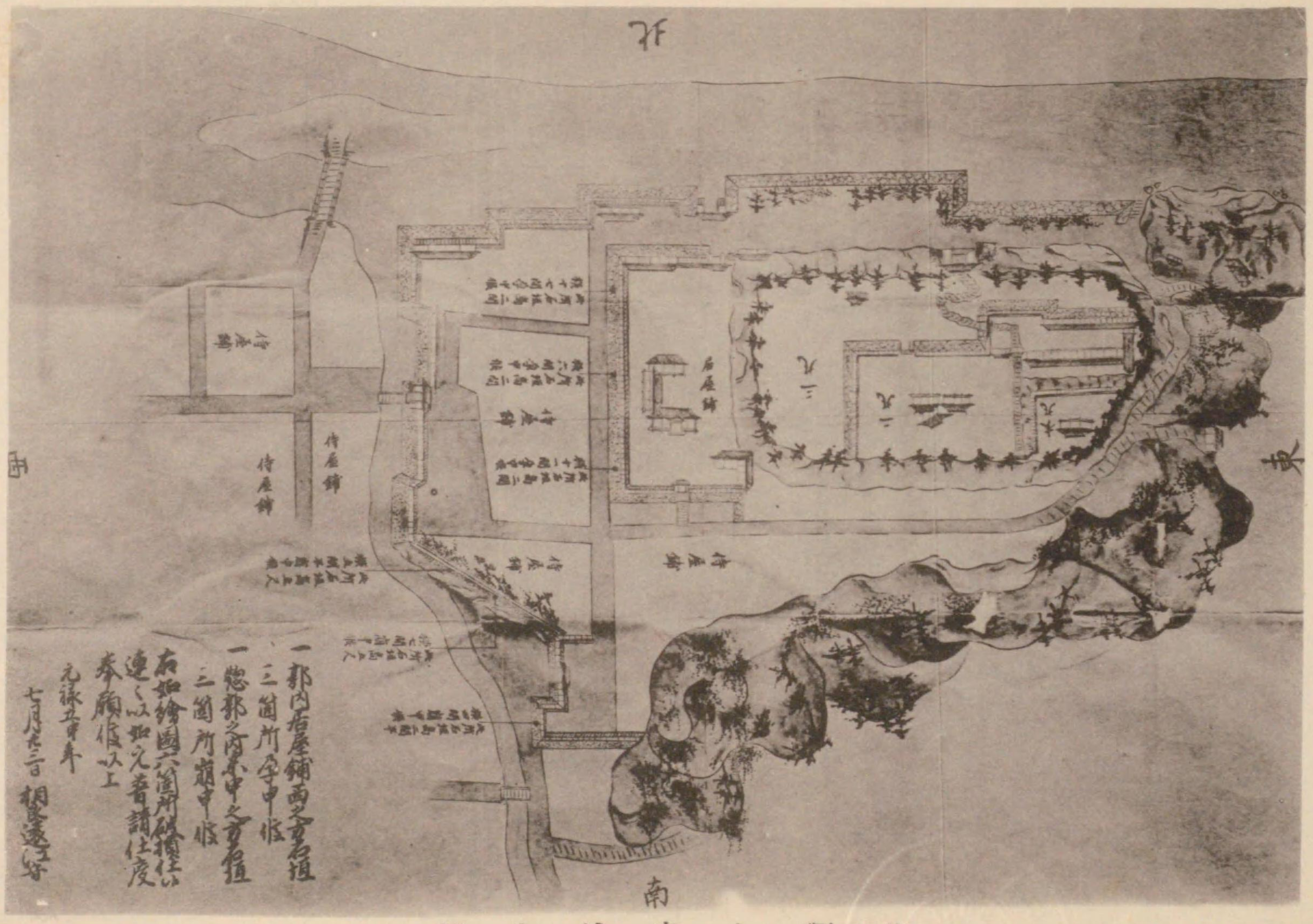
第七圖　征西將軍宮御書

第七圖　征西將軍宮御書

原寸　縦三尺一寸五分　横一尺一寸一分

相良近江守前頼參
御方、依致忠節、被遂御
本意之條、御感不少、
始中終之功、併被遂
思食者也、殊勵神速
計策、可施勇力、於
抽賞者、可有其沙汰
者也、
元中二年二月十七日

（後征西將軍宮良成親王前頼の忠功を嘉奨し給ふ）



（第八圖）人吉城古圖

（第九圖）人吉城趾

（第十圖）纖月石

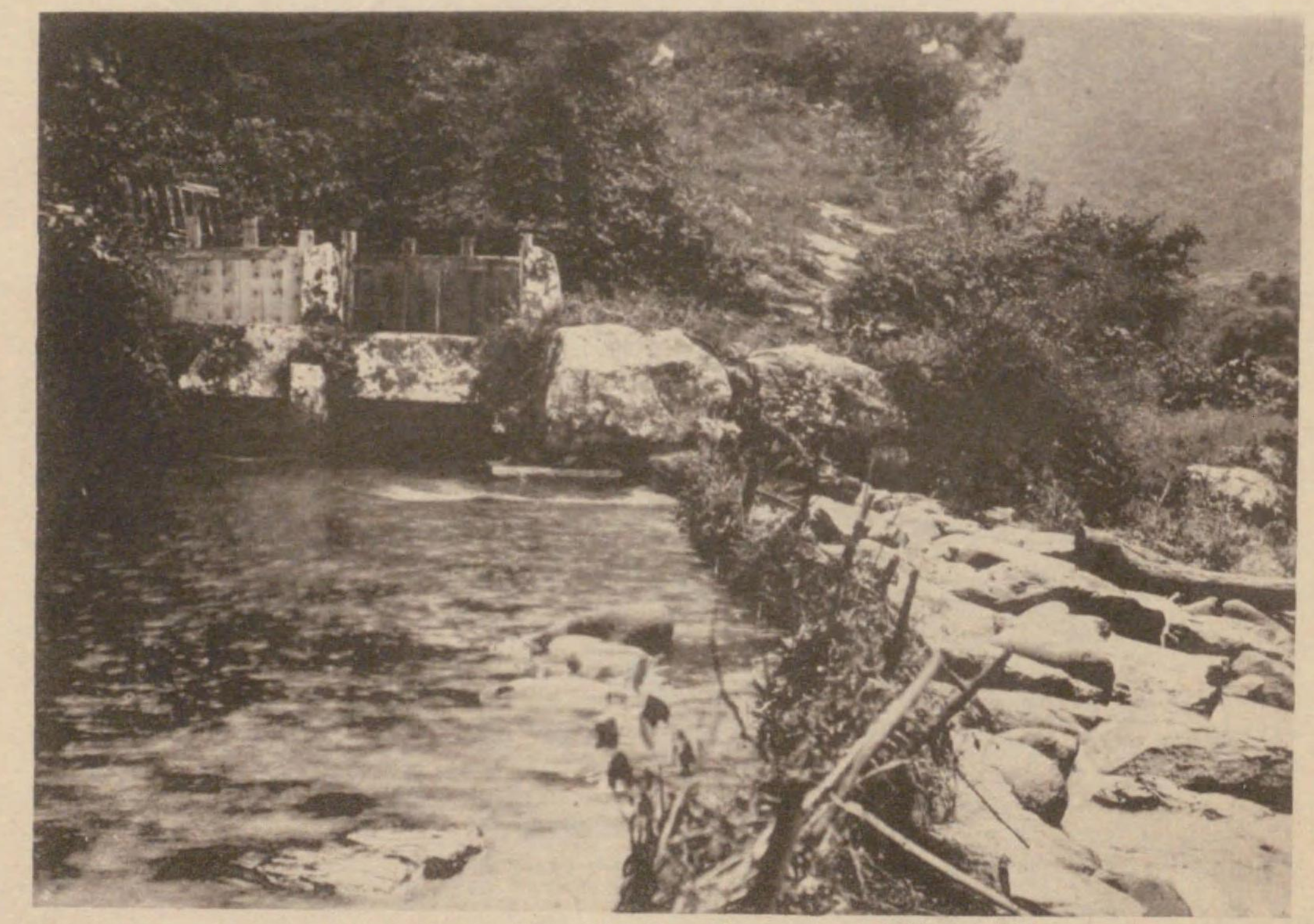
（第十一圖）　人吉城趾及球磨川胸川合流點

（第十二圖）　城趾より眺めたる人吉町

（第十三圖）　半兵衛殿石

（第十四圖）　日野佐一父子墓

（第十五圖）　磨球川亀割



（第十六圖）　幸野溝隧道入口

大正十五年三月二十五日印刷
大正十五年三月三十一日發行

非賣品

著作者 熊本縣立人吉高等女學校
代表者 美濃部道義

印刷所 熊本市春日町六九三
白石印刷所
電話一五八八番

印刷人 熊本市春日町六九三
白石貞雄

166
361